●本紙は世界主義を標榜して婦人解放を主眼とす

# 世界婦人

## ○住食衣論

安部磯雄

僞善者の生活は僞善である。人生の本義を考へずして單に虛僞なる習慣に支配せらるゝが如きは愚も亦甚しと言はねばならぬ。人々が衣食住と言つて、衣服を第一位に置き、食物を第二位に置き、住居を第三位に置く限りは、彼等は到底僞善的生活の束縛を免かるゝことが出來ないのである。吾人にして眞面目なる生活を爲さんと欲すれば先づ其順序を轉倒して住食衣となすことが必要である。

美服を纏ふて人々に誇らんとするが如きは虛榮の最も甚しきものである。衣服は清潔にして寒氣を拒ぐことを以て標準とすれば宜い。更に進んで多少美術的意匠を施せば充分だ。然るに一襲の衣服に數百金を投じ、金銀の縫箔を施して傑出人の目を眩するが如きは無分別も甚しと言はねばならぬ。近年東京市民が衣服に贅を盡すに至りたることは著しき事實であつて、昔は京の着倒れ江戸の食ひ倒れと言ふたことも、今日はこれを改めて江戸の着倒れと言はねばならぬことになつた。然れども是は單に東京のみの事ではなくて、我國全體の通弊であると言つて宜からうと思ふ。彼等が美服を纏ふて居る割合に、良き食物を食し、宜き邪宅に住居して居るならば、美服は必ずしも排斥するに及ばないけれども、若してれが爲め食物や住居が犧牲に供せらるゝことあれば吾人はこれを稱して僞善的生活であると言ふことを躊躇しない。

眞面目なる生活の標準より見れば衣服を以て最下位に置くべきことは何人も異論のなき所であらうが、住宅と食物とは何れを上位に置くべきかに就きには多少の疑點がないでもない。吾人は嘗て食物を以て第一位に置くべしと論じたこともあつたが、今日は住宅を最上位に置くことが最も至當である樣に考へらるゝに至つた。今其理由を簡單に陳べて見よう。

上等なる食物が果して吾人の健康を增進するや否やに就きては多少の疑點がある。世には菜食主義を實行して驚くべき健康を得て居る人もあれば、石塚左玄氏の如く穀食主義を以て健康を得る最上法なりと說く者もある。彼等は何れも疾病の原因が肉食に在ることを信ずるが故に、勉めて質素なる食物を食すべきことを獎勵して居る。吾人は果して粗食主義が吾人の健康に利益あるや否やを科學的に說明することは出來ないけれども都人士に比して常に粗食をなせる所の田舍人が却つて健全なる身體を有することを見れば、食物の良否は必ずしも吾人が想像する程に吾人の健康に影響を及ぼすものではないことが分る。食物の量が不足であれば其結果は勿論營養不充分となるに相違ないが、若し其量に於て不足なければ其質の粗末なることは必ずしも憂ふるに足らない。

これに反して住宅の吾人に及ぼす影響は極めて顯著である。吾人が晝夜間斷なく呼吸する所の空氣は極めて清潔でなくてはならぬ。故に吾人は空氣の流通宜しき場所を撰擇すべきのみならず、住室の換氣法を完全にし、併せて日光の透射にも注意せねばならぬ。殊に小兒を養育する人は何物よりも先づ住宅といふことに就て充分熟慮する必要があると思ふ。故に住宅の爲に幾分か食物を犧牲に供することあるも其結果は却つて良好であるに相違ない。大都市の人々は比較的上等の食物を食しつゝあるに拘はらず、漸次其健康を害し、三代の後に至れば殆んど悉く死滅するといふではないか。故に塵埃の充滿せる都市に住居を定むるが如きは大に考へねばならぬ所の問題である。

吾人は衣服を第一位に置く人の愚を憐むと同時に、食物を最上位に置く人の思慮尙ほ未だ足らざることを思ふのである。吾人は住宅を第一位に置くことの最も合理的なることを信ずるが故に、住食衣といふ順序が最も適當で自然的なることを斷言するのである。

●本號目次


○住食衣論……安部磯雄
○一片の義氣……滴水
○蓬摘む子……孤舟
○亂箭記……醉子
○靜思餘……本田命作
○海外時事……記者
○露國革命婦人メリースピリドノワ…記者
○音樂家の眼球……小野有香
○赤色旗黑色旗……山紫樓
○海內時事……記者
○革命家と宗教家……大石緑亭
○社會民主々義の祖カールマルクス…石川旭山
○小說魔モーパサン原著……二葉亭四迷
○小說放浪（ゴーリキー原著）……
○新紀元晚餐會……小野有香
○毒婦の研究……瀬尾響波
○空裡光……南無百無十讀人
○雜誌瞥見……記者


## 一片の義氣

滴水

女の命は愛執なりとぞ、誰が云ひ初めけん、まこと女の命は厚き情けなるべし、されど男子の生命は何なりや、理想といふな、てとわり地を離る、功名心といふな、あまりに空なる哉、宗教心といふな、心はいつも惑へるものを、たゞ一片の義氣とこそいへたゞ一片の義氣のみ存す、男子の生命はこれなり、つらき浮世にもはた空虛なる人生をも、かくて男子は勇を鼓して行く、さなり、人生意氣に感ずるものは、終に男子なるべし、

日の夕べ、西の山の端に群れて流るゝ灰黃の雲に念ひ入りて、眞の憂愁を覺ゆるものは男子なり輕躁浮薄なる世に居て、深刻なる痛苦と、嚴肅なる悲哀とに觸るゝ者は男子なり。

虛榮や、誤解や、怨恨や、諸々の醜き腸を有すといへども、常に僞らぬ情意を啓發せんことを願ふ者は男子なり。

男子は久遠の勝利を祈る、確く强き意氣を向ふ、たゞ一片の義氣、己れを欺かぬ情意ぞかし、かくていづくに善惡の差別ありや、かくてはいかで世の毀譽褒貶に動かされんや、女の戀といふものと、男の義氣と人は何と見るとも、共に沒我の愛なり、强くやさしき情けぞかし。

義を見て勇むは男の意氣地、物のあはれを耳にして、私かに痛むは女の心なり、たゞ彼れ等の力弱きをゆるせたゞ誠實なる血波が彼れ等の胸に熱狂するを見よ。人生の極美はこれなり、女の戀と男の義氣と——

理想といふな、宗教心といふな之れ等、皆、末の末なり、宗敎の眞意も、念へば、誠心正意、己れを僞らぬこゝろ意氣なり、男の願ひは己れを欺かぬ情意の啓發、之れのみ。

かくて、萬の物は光りを添へ、我が情操は燭え輝いて、渴仰となり、奮勵となり、努力となり、光明其の物となる。

缺點や、過失や、窮乏や、無智、それ等が何ぞ、人間の命とするところは、單純なる信念に存す、智識にあらず、純乎たる情感に存す、腦漿になくして、方寸にあり、道義といふものに存するに非らず、誠意といふものに存す。

さなり、男子の生命は、赤心の義氣のみ温くやさしき女の厚き情けと、硬く節くれ立ちし强き男の、僞りなき意と、嗚呼何者の美歟之れに如かん。

## 蓬摘む子よ!!!

（孤舟）

妖雲低ふ空を閉ぢ
山岳稜峭冬木立
水氣濃々峯しぶく
潮嵐轟々凄ましや

て、ひと本の山櫻
綻びそめし蕾まゝ
可惜挫きぬ凶潮嵐
篠突く白雨たばしりて

法聞け鳥の叫ぶ谿
せゝらぐ水の雨ほとり
酸化鐵にや赫く銹ぶ
畔の枯草撰り分けて

枯木の株か人の子か
つゝれの錦たゞひと重
草藁とまがふネルの切れ
ぬれぬ內こそ厭ひてか

紬がず織らず耕さず
並み居て共に餌をあさる
さま羨まし鳩番ひ
呪へ我が妹子現世の實狀を

叱！描寫けりな今日のさま
妖雲閉ぢ光り遮りて
白雨潮嵐荒ぶとも
花は咲くべし春の日に

根强く忍べ時は來ぬ
見よ〳〵天の一角を
閃くものぞまばゆくも
蓬摘む女兒よ可愛兒よ!!!

●女子大に讀むべく男子盛んに讀まざる可からず

Digitized by Google



Original from CORNELL UNIVERSITY

## 亂筍記

[illegible]子

▲政府とは何ぞやと、若し問ふ人があるならば、僕は下の如く答へるであらう、政府とは無暗に增稅して矢鱈に人民を苦める機械なり」と。

▲谷間の山杜鵑花は、如何に美しく紅に咲き出でゝも、見る人無く、知る人無くして淋しく果敢無く散つて行く。夫れと同じ樣に擊てば火花を亂るゝ熱烈なる感情を胸の中に燃しながら、發散さする機會を得ずに空しく老い朽つる不幸なる人々も世間には定めて多い事であらう。

▲人生は所詮肉慾の滿足である。美術とか、宗敎とか、道德とかは畢竟するに、赤裸々なる肉慾の要求若くは滿足を美化し、時化し、靈化せんと試むる虛飾の衣たるに過ぎない。

▲田舍から都會に出ると、都會の奢侈の風が著しく眼に著く、都會を出で丶田舍に行くと、田舍の貧困の有樣が甚しく吾人の心を打つ、都會を肥して田舍を瘠せさするのが近代文明の特色である。田舍より奪つて都會に與へるのがマムモニズムと云ふ惡魔の仕業である。

▲どうしても女子の心性は男子よりも劣等であると或る人が慷慨して語る、何故かと反問すると『現社會に於て最も甚しき壓制を被つて居るのは女子である、彼は政治上には無人格者であつて、社會上には男子の奴隸である。言ひ換ふれば彼は二重の奴隸である。然るに彼等は奮起して此の壓制の桎梏を毀たうとはしないで、依然として果敢無き虛榮の夢に耽つて居る。心性劣等にあらずして何ぞや』と答へる、成程此の論にも一理屈はある。

▲停車場のプラットホームに立ち、往き來るさの人を眺めて種々の思に沈む。あゝ洪水の堤塘を決する如き勢ひもて、毎日々々プラットホームより吐き出され、又吸ひ込まれつゝある多くの群集、彼等は何が故に爾かく匆々焉、遑々焉、惶々焉として徂きつ戾りつして居るであらうか。嗚呼、之れ云ふ迄も無く生存の爲めであるのだ。

▲掠奪の十字架に掛けられて、黃金神の祭壇に其の血汐滴る肉を捧げられて居るのが今の勞働者の身の上である。

▲人は他の多くの人を犧牲とし得る時に於て尊貴である、而して他の人の爲めに犧牲とされ居ることを自覺する時に於て失意である。

▲勞働者は世の鹽である、鹽無くんば世の凡ての食物は味を失ふ如く、勞働者無くんば社會の凡ての產物は忽ち其存在を失はねばならぬ。

▲今の世は賭博大流行の時代だ、而して還は主として日露戰爭の賜だ。戰後に賭博の流行するのは、恰かも梅毒を買つたアトで梅毒に罹るのと同じであらう。

▲敎育と國家とは當世の二大怪物である。權力の畑に生へたる同根異莖の毒草惡卉である。

## 靜思錄

革田會作

「一」

人は精神病院の患者を目して「狂人」だと云ふけれども、獨り僕は恐るゝ、彼等患者よりは、寧ろ「狂人」と叫ぶ者の方が、或は眞の狂人ではあるまいかを。換言すれば、精神病院の患者は、病人の無病であつて、通常の人こそ却つて、無病の病人ではさるまいかと。

「二」

人は懲役人を指して「惡黨」だと云ふ、けれども獨り僕は恐るゝ、彼等懲役人よりは寧ろ「惡黨」と罵る者の方が、或は眞の惡黨ではあるまいかを。

換言すれば、懲役人は、惡黨てふ善人であつて、娑婆の人こそ却つて、良民てふ惡黨ではあるまいかと。（了）

## 海外時事

### ○婦人參政權運動

英國の進步思想を有する婦人が、豫てより熱心に參政權獲得運動に熱中し居れるとは、吾等の屢々報導せし所なるが、去月十四日着の倫敦電報として都下諸新聞紙の報する所によれば、

土曜日、一萬人の婦人は列を爲してアルバート、ホール附近に集り、樂隊及び旗を押立て、婦人參政に關する示威運動をなしアルフレッド、リフトルトン卿夫人、ロイド、ヂョーヂ氏夫人、フランシス、バルフォーア夫人及ヘンリー、ソマーセント侯夫人等は殖民地を代表して是に參加し、其他知名の女醫師、婦人著述家、工女、家婢等右の行列に加はれり。

と、越て廿二日着の倫敦電報には『婦人參政權論者は昨日ハイドパーク公園に一大示威運動を爲し、各階級の婦人三萬人は列を整へ、警官に護衛せられて同公園に到り、婦人投票權に關する要求を決議せり。』と記せり、是れぞ所謂東洋君子國の紳士淑女方や、彼等の鼻息を伺ふを是れ事とする學者樣達やお轉婆どもが狂態なりと嘲り給ふ所の事業なり、さりとては、君子國とは男子が婦人を玩具の如く裝飾品の如く、奴隸の如く、米櫃、竈、に非ざれば生殖器械の如く思召さるゝ國柄を申すとてこそ思はるれ、英國の進取的婦人は此の如き君子國の婦人たるを恥ぢ給ひて彼の如く執念強く奮鬪し給ふと知り給はずや。

### ○波斯革命擾亂

波斯國内に革命的熱望が澎湃として漲り來りし事は都下諸新聞電報欄に絕えず報導せられし所なるが、去る十八日着の倫敦電報は曰く

▲國王の傲　波斯王は議會の代表者に對し朕が祖先は劍を以て王位を獲たり朕は劍に訴ても尙且つ王位を失ふが如きを爲さすと答へたりと

何れの國の王位と雖とも劍を以て獲得せられざるもの有ると無し、而も二十世紀文明の世界に於て王自ら之を傲語するに至りては暴も亦甚だしと言ふ可し、果然國民の憤激は俄かに爆發し來りぬ、去る二十三日米國桑港發電に曰く

▲波斯首都の慘劇　波斯の革命黨は首府テヘランに於て官兵と衝突し老幼婦女の殺害されしもの八百名に及べりと

越えて二十四日倫敦タイムス社發電に曰く

▲砲戰二時間　帝室砲兵隊は議會を包圍し國民黨員連に不意擊ちを加へ發砲二時間の後右議會防護隊を潰走せしめたり又議會禮拜室及チルレサルタン宮殿等は全然掠奪を蒙り且牢破壞せられ國民黨の死傷は數名の代議員を始めとし約七十名に上れり

現代世界に橫流する民主的革命の大潮は遂に斯の世界最古國を侵して騷亂を惹起するに至れり、露國の革命亂が今や白熱的狀態を呈し、支那、印度の革命思想が亦た當に激越の調を帶び來れるに際して、波斯に此動亂あり、世界の平民が一時に烽火を揚ぐるの時近きに在りと爲すも、必ずしも妄誕臆說と言ふ可らず。

### ○芬蘭國會

芬蘭國會は僅かに其第一期の議會を開きて幾時ならずして解散たり、元來同國會は歐洲各國中最も民主的に組織せられしものにして、殊に十三名の女子議員を包容せるとは一般歐洲人の耳目を惹きし所なるが其始めて開會せらるゝや、忽ちにして保守的なる内閣と衝突を來したり、而して去る三月廿七日激烈なる内閣攻擊の決議を採可して遂に内閣員をして辭職せしめ、其結果として皇帝は議會解散の勅令を發するに至れり、猶ほ其第二回の總選擧を六月中に行ひて、新議會を八月中に召集する筈なりと云ふ、吾人は次回の議員が從前に比して增々民主的ならんとを切望す。

### ○米國失業者四百七十五萬人

最近の英國『毎日電報の』報する所によれば北米合衆國全部に亘りて失業者の數四百七十五萬人以上に達し、而も其計算は單に組合員たる勞働者に過ぎずして農業勞働者其他多數の失業者は此外に在り、又同國に於ける生活費が少しも減せざるに係はらず、一般に二割の賃銀を減じたるを見れば、其假令職業を有する者も亦相應の苦境に呻吟しつゝあるを察するに足らん近時產業界の不振は單に米國のみの現象に非ず、日本のみの事實に非ず、階級制度を以て構成せる現代の諸國民軍國主義を以て成れる現代の諸國民は、皆此悲境に陷りつゝあり、自殺、投身、殺人の夕朝相繼いて起り來る日本の現狀に寒心しつゝある者は、宜しく眼孔を大にして世界の大勢を達觀すべき也。

## 讀者諸君の寄稿を望む

何から何まで一人の手で經營するのですから、不思議はありませんが、何時も飾りの

## 謹告

本紙第七面五段末尾「の表評に係る」よりの四行は、五段冒頭に入るべきの處印刷所の



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

# ◎露國革命婦人メリー、スピクドノヴワの

△世界第一の美人副知事の暗殺
△法廷に[illegible]して毫も凛然たり
△今年廿四才西伯利亞を脱走す

（一）

露國革命の女傑メリー、スピリドノヴワは此程西伯利亞を脱走して伊太利に向へりといふ。

メリーの肖像は現代世界に於ける最も美しき婦人の一人として曾て「デイリー、ミルロー」紙上を飾ぜりき、其顔貌の如何にも愛らしく、優しく、無邪氣なる、其眼は天空の星の如く輝き、其口はいつも花園に聞く音樂の如き聲を發し、而して其精神の奥底に秘める清き美しき光明は總ての言語動作の上に表はさるといふ、今、吾等は此美しき革命少女が閲歴の一端を聞きて深き〱感激と欽仰とを受くるなり。

メリー、スピリドノヴワは一八八四年タムボフ縣に生る、兩親は實に相當の智識ある人なりき、彼女は未だ幼かりし時よりして、此地方の農民に對する殘酷なる壓迫の爲に憤激せしめられき、其地方高等女學校に高級生徒となれる時、彼女は既に「學校兒童保護協會」の事業に多大の興味を感ずるに至りたり、此反抗運動の爲に彼女は芳紀僅かに十五歳にして捕縛せられて獄に投せられぬ、而して其僅かに放免せらるゝや「政治的注意人物」として警察看視の下に付せられたり。

（二）

一九〇五年の秋、農民の擾亂起るや、タムボフ縣副知事ルヂエノヴスキーは縣下の村落を巡廻して刑罰を行ひ歩きぬ、彼は酷薄なる鞭を携へしコサック兵を以て自己の周圍を繞らして無力なる男女少兒の中を横行し、有罪無罪の差別も無く暴民虐待酷罰を敢てして省みざりき。

かくて人民の多數は死に擬せられぬ、彼等の憐れなる家は放棄せられぬ、彼等の少兒等は生涯の不具者とせられぬ、彼等の婦人は凌辱を恣にせられぬ、而して當時僅に二十一歳の少女たるメリーは亦た其中に在りき。

タムボフ革命委員が此殘虐者ルヂエノヴスキーに對して死刑の宣告を與ふるや、メリーは直ちに之に應じて其宣告實施の任に當りたり。後日裁判に際して法廷に發言して曰く、

「私の胸には血潮が漲つて居ました、私は私の周圍が此様な状態なのを默視するのは非常な恥辱と思ひました、私は當の虐待されて發狂した農夫を見たり、又た彼のコサックの淫慾を賦ふて自殺した子女等の無數を見た時に、實に自分にコウ思ふたです「假令私の生命に係はるとも私はドウしてもルヂエノヴスキーを斃さう」と」。

メリーは意を決して直ちに實行に進みたり、彼女は高等女學校生徒の簡易なる服装を爲し、暖手套の中に彈丸こめたる連發銃を藏し持ちて、ルヂエノヴスキーが常に屢々往復する道筋を鐵道にて行き通ふこと數日なりき。

（三）

一八〇六年（一昨年）一月十六日、遂に彼女の爲に好機會は來りぬ、ルヂエノヴスキーのコサック護衞兵はプラットホームを掃蕩し、苟も怪しと見ゆる者は容赦無く場外に逐出せり、而も汽車を離るゝ散歩の所に立てる輕装せる、黑眼勝ちなる一女學生には何人も注意せざりき、ルヂエノヴスキーは誰も居らぬプラットホームに唯だ一人下車したり、忽ち轟然！　メリーは發射しぬ、ルヂエノヴスキーは傷つきぬ、彼女は猶も其事を成就せん爲め、馳せ寄りざまに更に三發を射續けたり、而して彼女は其ピストルを我が身へと差向けたり。

されど其は徒かりき、コサック兵は既に手を彼女の上に掛けぬ、コサック士官アブラモフは彼女の頭髪を手に引からげて彼女を吊り揚げ、はてはプラットホームに擲げ付けぬ、かくて其兵卒に命じて停車場の石段より彼女を引摺り下し、直ちに凍れる獄舍の中に彼女を投じたり。

（四）

其後數日に亘りて、彼女が受けたる殘酷なる拷問と、名狀すべからざる凌辱とは、今茲に詳序すること能はず、メリーの辯護士の要求に應せる獄醫の證明は、之に對する非難の聲を全世界に發せしむるに至れり、彼女法廷に立ちて裁判官に陳じて曰く、

「私自身に就きましては、既に其刑罰の定められてゐることを承知して居ります、乍併、よし貴方等が私を死罪に處するとも、又、よし貴方等が如何に非道く私を責むるとも、決して私が今までに受けた苦痛に勝ることはありますまい、私を殺しなさい、けれど私の信仰を殺すとは出來ませぬぞ、人民が自由に幸福になり正義公平が勝利を得、而して友愛、平等自由が實現せらるゝの時が近く來るべしとの信仰を殺すとは出來ませぬぞ、此の如き未來の爲に、個人の生命を犠牲とするのは眞に幸福ではありませんか？　私は是以上に何も言ふ必要がありません」

斯くてメリーは遂に死刑の宣告を受けぬ、されど露西亞は固より佛蘭西の人心も爲に俄かに憤激の聲を揚げぬ、非難攻擊は各方面より起りたり、倫敦の婦人團體よりは熱誠を込めたる請願を呈出したり、而して死刑の宣告は終身懲役刑に變更せられぬ。

然れども數月間、彼は猶ほ生死の間を彷徨へり、急激なる肺炎は彼女の爲に眞に恐るべき大事となりぬ、而も彼女の體質は驚くべく强壯にして、其大なる惡魔は漸く驅除せられ、彼女は今は生存したり、されば政府は遂に彼女を西伯利亞に送りて、アカツイ監獄に投ずる手續を爲しぬ。

（五）

彼女の旅行は何處に於ても秘密なる能はざりき、其道筋にては到る所に熱烈なる人民の感動を惹起したり、彼女の案内者と護送兵とは彼女に對して公然同情を表したり、此の報道が知事の耳に達するや、彼は痛く憤りて、一九〇七年二月自ら使者を發し五名の革命婦人と共にメリーをマルゼツフ監獄に轉送すべしと命じたり、マルゼツフ監獄は其規則極めて嚴酷なれば也。

かくて其後、メリーの虐待者拷問者たるコサック士官アブラモフと警部ジメノフとは、何れも其非行の報酬として革命黨の爲に射殺せられたり、而して今や却て、メリーの脱走して伊太利亞の途上に在るを聞く！　貴方にては定めし彼女の到るを待わびなん、此方にては定めし熱心に彼女を歡迎せん、而して彼女の健康が全然回復せりとの事にして眞實ならんには、彼女が將來の活動は又た刮目して見べきものあらん。

（六）

彼女の年齡、尚は僅かに廿四歳なり、思ふに、露國平民が「自由」の新世界に歡喜の歌を謳ふの時、彼女、尚は健全にして今日の齋事を追懐するとを得ん、吾等は斯の勇敢なるメリー、スピリドノブ孃が健康を祈るや、甚だ切なり、アムールの谿谷、より結氷の解くるとも、荊棘深くして峻嶮なり、東海の波浪、より静なりとも、熱瘴冷雲交々襲來す、希くは千里の舟車、尊き彼女を安全に南洋の新開陸に送らんとを。

## 音樂家の

小野有香

一日少女會の席上で初めて橘某子といふ女流の筑前琵琶を聽いた。筑前琵琶は私が好きでもあらうが、彼はいみじう上手のやうに思つたが、時々黑檀のやうな黑い瞳をぐるぐると廻はして周圍を見るのであつた。

私は其時思つた、何故一心になつて其手許の撥を彈いて其に入つて居るべき時間に、そう度々黑い瞳を廻してあたりを窺ふ必要があらうかと、可愛い眼だが何だか嫌な感じがした、否それを思ふ毎に今でもさうである。

後、五十嵐力氏著「兒童の研究」を讀んでふと此事を連想する機會に出逢ひ、彼々成程と合點が行つた節がある。書中「視官」の條下こんな事が載つて居る。

學齡兒童或は成人の眼球を注意して觀察すれば、それが水銀の球の如く休む時なく働いて、極めて些細な事の爲にも、頻りに上下左右に運轉するを見る。これは要するに物體及び其周圍をあまねく會得せむが爲めで、其等の運動に目的の無いのは殆どない。

成程「其周圍を會得せむ」が爲めであつたらう。神來感應の場合の如きは傍に人ありや否やは素より顧せざる所、天上天下唯我れあるのみ、否、我、我れをすら忘る、換言せば無想の境であらう。さはれかゝる神來の感應は稀有にして尋常茶飯の席に求むべくもあらず。

さればこそ我が得意の撥の音によりて、聽衆が如何に感じつゝあるかを會得せんとするは、強ち無理ではなからう。彼れ橘女史の黑い眼球のぐるぐる運動も亦決して、『目的の無い』のではなく、無意義ではなかつたであらう。

されど私は演奏者にして而かも興趣湧くが如き最中に、彼の黑い瞳のぐるぐると廻るのを見ては嫌になつて仕舞ふ。



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

# 赤色旗、黒色旗

山 [illegible] 樵

（一）赤色旗

去る廿二日山口義三君出獄歡迎會の後で無政府的社會主義者の一團と神田警察との間に一葛藤が起つて、夫れから世間を騷がした、處が其葛藤の起原はといふと何でも無い、至極簡單な事だ、唯だ無政府主義者が其歸へるさに三旒の赤色旗を押樹て、街道を練り行ふとするのを警察がオツとそうは行かぬと差し止めたまでのことであつた。

唯だ此の小さな三旒の赤色旗が此程までに日本の政府樣を苦めるといふは一體ドウした譯であらうか、尤もアの三旒の旗には「無政府共產」「無政府」「革命」など、云ふ文字が鮮かに書かれてある、作併、コンな文字は日々に發行される新聞や雜誌や書籍に幾百千個現はる、か計へされぬ程である、ト言ふて無政府主義者が出獄迎をやるといふ事も曾て聞かねば人殺や泥棒を仕たといふ噂も聞いたとが無い、殊にアの日は警官と鬪つた諸君は、大低皆吾儕の親しい友であつて、學識あり確信ある人々である、果して然らば何の爲に日本の政府はアレを御差止になつたのであらう！或は其旗が血の如き赤色であるといふ一點が政府の忌諱に觸れたのであらうか、マサかに左樣でもあるまいが、僕は先づ此の赤色旗の由來に就て少しばかり贅言を費して讀者の參考に供したいと思ふ

赤色旗は今日では世界社會黨の目標と定められてあるか、抑も其赤色は如何なる意義を含有するのであらうか、之には種々なる說がある、左に其二三を揭げ示さう

一に曰く、「赤色旗は世界萬國の人類が同胞であるといふとを表章するものだ」

二に曰く「赤色旗は屢々平民階級の流す血の表章で、又同時に、犧牲せる人民の救濟を表はす」と

三に曰く、「赤色旗はポーロが宣傳せる神は萬國の國民を一色の血を以て造れり」てふ福音を表章するものだ」と

四に曰く、赤色は佛國勞働者の爲には何等暴動の意義を表はすもので無く、都て產業の平和的共和主義の表識と言い得るであらう」

五に曰く、「赤色旗は人民が自由の爲に流せし血の表章である、各國の社會黨は之を採用して、各人種の友愛一致の表章となす」と

之に依て見ると、赤色旗其物には左程に怖ろしい意味が含まれて居るとも限らない、唯だ之を用ゐる、人々の性質に從つて隨分怖しい意義を表はすので今日では赤色旗と言へば大かた革命的の意義を含む樣になつて來た。

（二）黒色旗

處が社會主義團體中に「黒色」を以て其表識とするものが起つて來た、即ち今より二十餘年前、亞米利加に於ける「萬國勞働協會」の一派に此團體が起つたのだ、茲に一の注意すべきとがある、ビスマークが曾て獨逸の羅馬加特利敎に黒色世界主義（Black International）の名を付したとがあつて爾來此名稱が廣く通用せられたが、社會主義のとは全然其由來を異にすれば一言して置く

一八八三年、米國に於ける萬國勞働協會が三派に分れた、第一は常時獨逸より渡つたヨハン・モスト等の屬する International Working People's Association といふて、最も猛烈なる革命を唱導し、終に紳士閥の暗殺を奬勵したものである、而して彼の陰凄な色の「黒色旗」を以て其徽章としたのは即ち此團體であつた、他の一は前のと少しばかり名を異にしたる International Workingmen's Association で、此團體も固より革命的の社會主義團體ではあつたが、然し前の團體の樣に無闇に暗殺などをしても駄目だから、専ら勞働者を組織して團結と勢力とを造るべしと主張するのであつた、此團體は各國の社會民主黨と同じく赤色旗を用ゐたのである、第三は最も穩和なる社會主義勞働黨である、之れとて革命といふとを全然否認した譯では無いが、平和に出來る革命は宜しく平和に遂行するが良いでは無いかといふのが此派の主張であつた、ソコで、此第三派に「青色黨」の名稱を負はせた、青色は即ち保守の精神を表章するのである、然し此名稱は遂に廣く通用さる、に至らなかつた、

尤も、以上の如く三派に分れたもの、彼等の祖師はカール・マルクスであつた、面してマルクスの『資本論』は三派の爲に等しく經典の如く尊ばれたのである、

此黒色黨の中に「黒手組」といふ猛烈なる團體が出來た、「實行の傳道に突進せよ」「ダイナマイトの使用を擧べ」「死を決して戰へ」等の標語を以て激烈に活動したものである。

（三）御用心が大切

赤色旗を翻へして街頭を練り廻るといふ位の處では、マだ政府樣は御安泰である、之が時勢の變遷でドウ反れて行くか分らない、赤色旗位ではマヌルいから黒色主義でやらうといふ『黒色黨』『黒手組』が出來たらドウであらう、今でさへアの樣に狼狽なさる政府樣は定めし狂顛するとであらう

一八八〇年代は歐洲の無政府黨が露國革命黨の感化運動に動かされて最も猛烈な活動を試みた時代である、然るに今や東洋に於ては支那の革命運動を初めとして印度、波斯、比律賓等の平民が一齊に劍を持て起たんとするの氣運に差迫つて居る、既に周圍の形勢此の如しとすれば日本に「黒色旗」の翻るだらうといふ事も強ち夢想とばかり言へまい、政府樣は今から御用心が大切で御座る

## 海内時事

### ●戀故と貧故

近時、日々の新聞紙三面を埋むる所の記事は悲慘悽愴其極に達し候、傳へ聞きつる百鬼横行の阿鼻獄も之には勝らじと推想せられ候、日々に現はれ來る記事が果して眞實なりとせば到底人間業とは思はれず候、然れども深く精かに此等の事實を考察すれば固より今日の社會が當然產み出すべき結果にして、少しも不可思議には無之候、曰く文士の自殺、曰く中學校長の自殺未遂、曰く母子四人の投身、曰く失戀自殺、曰く親殺し、曰く貰子殺し、曰く面當て自殺、曰く抱合心中、之を精かに計へ來つば過去一ケ月間の事實のみにても百件以上に達すべし、然れども此等千差萬別なる悲劇慘狀を演じ出す所の原因は極めて簡明に候、曰く戀故、曰く貧故、今日の如き生命なき虛偽の道德と法律とが社會を支配し居る間は戀愛の神聖を保持し、戀愛の自由を實現すると到底不可能に御座候、今日の如き階級制度、財產私有制度の社會に於ては「貧困」てふ慘狀は到底消殺すると不可能に候、然るに社會人心の內面を考察するに、日露戰爭の勃發を機會として、從來久しく鬱詰せる人類本來の與情は忽然として外殼を破つて迸り來らんとし今や將に其內なる爆發と外なる偽裝とが相衝動しつ、ある時代に候、社會其自身が今や其大顚倒に陷りて七顛八倒しつ、あるに候、今日の新聞紙上に表はる、總ての慘劇は即ち此大暗潮に浮動し來れる一泡沫と見るべきものに候べし、宗教家の言を借りて申せば、是れ實に日本人が長き罪惡の贖ひに外ならず候、吾等は時代の推移に於て此の現象が遂に消散し去るべきを信ずるが故に徒らに悲觀するに非ずと雖ども、而も此暗黒時代に處するに深く自ら戒むる無きを得ずと存候。

### ●普通選擧示威運動

普通選擧の運動は年々世人の注意を惹くと多きを致し、年々其運動の勢力を增し年々實際的方針に步を進めつ、あるが、此程都下の新聞紙報じて曰く

普通選擧を唱導する中村彌六、中村太八郎、青地雄太郎、片山潜、加治壽衛吉、植松考昭、安部磯雄、上野安太郎、田川大吉郎、日向輝武、松本君平、木下尚江、佐伯與平の諸氏は十九日夜ロセツタホテルに會合し二十五議會には同志の民衆一萬餘名を會し議會開會當日普通選擧期成の歌を奏しつ、兩院を三周することゝなしたり其歌は懸賞して汎く募集する筈なりと、吾儕は深く諸氏の勞を謝する者に候、唯だ吾等の諸氏に向つて一言申度は、既に普通選擧と申す以上は男女間の差別制限等は始めより斷じて排除せられんとに御座候、固より進步思想に富みたる諸氏の結合の事なれば、こゝに御如才はあるまじく候得共念の爲め一寸申上ぐるにて候

### ●米國女學生隊の來遊

北米カリフォルニア州のロスアンゼルス女學校にては、夏期三ケ月の休暇を利用し、女學生等の見聞を博むる爲め、日本の文物を視察せしむることに決定したるに女學生の父兄等も大に之を賛し、其數忽ち七十名に達したれば一兩日前勇ましくも同市を出發してミネソタ號に乘込みたり、彼等學生は年齡十八乃至二十歲の處女なれば旅行中萬一の事ありては父兄に對し申譯なしとて監督を嚴重にし四名の生徒に一名の女教師を附し起居動作は總て教師の指導を受けしむる由



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

# 宗教家と革命家

大石禄亭

(一)

○古來宗教家と革命家は甚だ仲が惡るいもの、やうに見られて居るが、實際眞の宗教家は革命的の意氣を有たねばならず、眞の革命家は宗教的の信念を抱かねばならぬ。此二つの性質を併有した人が、眞に宗教家としても革命家としても、人を救ひ世を改善し得るのだ、尤も宗教は主として人心に訴ふるもの、革命は社會の制度に及ぼすもので、其行方は自ら異なり時として氷炭相容れぬが如く思はるゝ場合もないではないけれども兩者の目ざす所は一つであつて、互に其腹を割つて見たならば、双方とも同じ血が流れて居る兄弟だと言ふ事がわかる

(二)

○さて何故宗教家が革命的の意氣を有たねばならぬかと言ふに、彼等が其信仰の目を開いて此世の狀態を觀察する時は、到る所虛僞と罪惡とに充されてある事を知り、飜つて之と戰ふの必要を感ずるであらう。さうして苟くも自巳の信念に違ふものがあるならば、王公貴人をも罵倒し盡し國土の權勢をも顚覆し去るの勇氣を起すであらう。茲に於て必然彼等の目前に現はるゝものは世の迫害である、此迫害には二つの種類があつて、正面から鞭と劍とを以て攻擊して來るものには却つて之に應じ易く、生命を捨てゝもそれを征服せねば止まぬと言ふ勇氣が出る、所が尙ほ一種の迫害は大に其趣を異にして迂餘曲折の道をとつて來る、これは決して正面からの打擊でなく、或は之を歡迎するが如く或は之に贊同するが如く又時としては世俗の榮華と利祿とを見せつけて誘惑し、之を骨抜きにし之を生捕りにしようとする、斯う言ふ陰險な迫害が何よりも最も恐るべきもので、此危機に瀕して尙ほ墮落を免かるゝ宗教家は、單に自巳の信念が確固たるのみに止まらず、世の權勢儀式に反抗する革命的の意氣を抱くものでなければならぬ。

(三)

之につき余が一つの實際教訓を得たのは先日大舉傳道の序に余が地方へ來られた日本基督教會の牧師某が話された事である彼は先づ我教派の盛況を述べて過去數年間に長足の進歩を爲した事を語り、其證として前年度に於ける全國の獻金は七萬圓に上り財產總額金三十万圓の多きに達したなど一々數字を以て詳細なる事實を示された。さうして尙は彼は近頃伊勢の某所へ新築した教會の獻堂式へ其市長が臨席して祝詞を讀んで吳れた事などの話しを爲し、是等の事は現時の日本に於ける社會と人心が、如何に強く基督教を歡迎して之を受容れんとするかを示すものだと言はれた。啻に彼のみならず今の基督教徒の多くは彼等が世人から厚遇せらるゝを見て、是れやがて日本が基督教化さるゝ前徵であると喜んで居るのらしい併し自ら之を他の半面から見ると却つて基督教徒が世俗化して現代の權勢に籠絡させられたものではないか試みに見よ、彼等を厚遇しつゝある今の社會は、之に峻烈な迫害を加へた三四十年前の社會よりも如何ばかり清潔になつて居るだらうか。如何にトボケた基督教徒でも之を以て神の旨に適ふ世の狀態であるとは言ひ得まい。

○過去二三十年間に於ける日本の文明は愕くべき長足の進歩をなしたと言ふ。併しそれは唯だ立派な吳服店が出來たとか、ホテルが建てられたとか、競馬會社が起つたと言ふに止まり、國民特に上流紳士間の風俗と道義の退化墮落は之れを口にするだも恐ろしい位である、單に之を數字の上から考へて見ても、日本の某々教派中最も勢力ありと言ふものが一年中の献金は、富豪が一夜の解宴に使ひ果たすだけではないか、さうして其教派に屬する財產總額は、一の營利會社が創立費として賄賂と酒食の料に消費し去る所のものにも勝らぬではないか。然り、今の宗教家は貴族富豪の飮酒荒淫を傍觀して、僅かに其テーブルより落つるパン屑を拾ひ、それを以て大擧傳道だとか教會の獨立だなどゝ騷ぎる。さうしておまけに宗教家ともあらうものが大隈相塢伯の馱法螺を聞いたり、伊藤拜々公のお世辭に耳を傾けて喜んで居る。これがはんとうに天下泰平と言ふのかお目出度いと言ふのか到底お話しになつたものでない。

(四)

○此外、尙ほ一種の宗教家がある。彼等は能く今の國家が腐敗し教會が墮落して居る事を認め、之を非難するに於ては可なり嚴しい言葉を放つて居るけれとさて、實際に如何なる處分を施すかと言へば、唯だ之に悔改を說き之が爲めに祈りを爲すに止まり敢てそれ以上の手段に出る事を好まぬ。彼等は今の人民が租稅を納め兵役に就くの愚なるを知り、勞働者を驅使する貴族や富豪の橫暴なるを覺るの點に於ては、毫も社會黨や無政府黨の後に落ちるものでない。けれども之を如何にせんとするかの問題に遇へば、彼等の信仰は全く不毛であつて何の結果をも持來さない、宛然彼等は智覺神經のみ鋭どく運動力の麻痺した中風患者のやうなもので、その說教が如何に親切であつても、祈禱が如何に敬虔であつても、到底無用の長物と言はねばならぬ。そこで余は宗教家に必要な性質は單に慎み深い事や穩當な事のみでなく、反抗的革命的の意氣であると思ふのだ。

(五)

○次ぎに革命家にして往々無宗教を標榜するものもあるが、それは唯だ既存の何宗何派に屬せぬと言ひ得るばかり、實際宗教的信念に根底を置かぬ革命と言ふものが作り得べき筈はない。彼の卑近なる利巳心により單に自分の感情と慾望を充足せんとするものゝ如きは、或は放蕩兒となり遊惰の民となり得るであらう、而かも世を濟ひ人を助けんとする革命家に至つては、其胸中に單純なる利巳心を外にして何かより深くより大なる信念が潜んで居るに違ひない、勿論彼等自身には之を以て宗教的信念なりとは思はず、唯だ之を物數寄にやるのだと言ふのであらう併し社會改革のためには名もいらず金もいらず、獄に繫がれても首を刎られても構はぬと言ふやうな物數寄は、それこそ立派な宗教的信念ではあるまいか、その何となくと言ふのが至極不可思議な點で、其所に絕對の神もあり無限なる佛も存在するのだらう。

○此點に於て、余は新佛教の諸子が我々社會主義者の分爭を批評せられたのは大いに傾聽の價ある言だと思ふ、我々が見苦しい分裂を爲したのは、高島氏の言はれたやうに全く無宗教だからでもあるまいが、實際宗教心が足らなかつたからだらう。我々の内よし基督教の神を信ぜず佛教の如來を拜まぬものがあつても、若し主義に熱中して驀らに進むものばかりであつたならば、則ち革命宗の熱烈な信徒であつたならば、決して他人に聞かせて恥かしいやうな喧嘩はせなんだであらう。所が御互の（少くとも其一方の）信仰が冷却してそこに利己心や利益の念が乘ずべき間隙を生じたから、終にあんな事になつたのだ、論者が此すきを捕へて直ちに無信仰の爲めなり無宗教の爲めなりと言はれるのはチト殘酷な次第ではないか、又純?宗教家の立場から見て革命家の熱情と言ふやうなものは、決して本當の宗教的信念でないと言はれるかも知れぬが、實際之によつて安心立命の境に居るものがありとすれば、これ則ち一種の宗教であつて、論者が所謂純粹な宗教との差別は到底黑砂糖と白砂糖の相違に過ぎぬだらう。少くとも俗臭紛々たる多くの僧侶や牧師に較べて見て、こんな不信心な革命家の方が大なる安心を得て居ると言ふのは如何にも不思議な次第だ。

(六)

○要するに宗教家として全く革命的の意氣を缺くときは、結局退いて祈禱をのみ事とする臆病者となり、革命家として全く宗教的の信仰を抱かぬものは、唯だ破壞をのみ事とする暴漢となつて了ふ。然り祈禱と爆彈、則ち宗教と革命。此二つのものは社會を動かすに何れも無くてならぬものだらう但だ一人にして祈禱と爆彈を如何に使ひわけるべきか、一國に於て宗教と革命と何程を多く要すべきか、そは唯だ時と所に應じ自然が決すべき問題であつて、我々人間の窺知すべきものではない。

# 詩人

專守

自然を歌ふ詩人、人事を唱ふ詩人、戀を謳ふ詩人、詩人とは妙な動物である、其の作物で見ると、我の强い、感情の激しい、神經の過敏な、偏屈な、狹量な、空想的な尻の輕い、イヤな奴だ、「田は作るとも歌は詠むな」とは千古の名言になつて居るが、一體詩人とは何だ、何のためにあんなくだらんものを作るんだ、考へて見れば、なか〳〵馬鹿には出來ないのである、詩人は空想する、神經は過敏で、感情は激しいで、その詩人の題材となり、詩人の胸を塞がすその(もの)は、抑々何か。

素より詩人は自家の主觀を表白するものである、其の主觀の琴線に觸れたるものは其の刹那に於て其の詩人に絕對的價値を有するものである、詩人の詩は彼れの人生觀である、彼れの思想である、彼れの性格であり趣詣である、而して同時に興理であり眞理である、たゞ、彼れがエゴイスチツクの賦を弄するの所以で直ちに偏狹の名を冠せしむのは違つてゐる、唯一つの題目をのみ歌ふ所以で直ちに之れを目して其の他を知らざるものとなすは却つて無茶である、何となれば、唯一つの問題を謳唱するから彼れは其のとばかりしか知らぬといふ事はいへないのであるから……。

世の革命家と稱する者、彼れ等は一面詩人である、云ふ所は常に單一である、寧ろ偏屈である、專心一意、他事なき人等である、然し、世間知らずぢやない、沒情漢ぢやない、實理を辨ふ者でもない、革命を唱ふ詩人、革命を成す詩人、義を呼ぶ詩人、意氣地を歌ふ詩人、これ革命家である、世は澆季、革命の天鼓に足調子合せて、舞へ唱へ、躍れ、詩人！



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

## 社會民主々義の大成者カール・マルクス

▲少年時代

近世の社會主義を大成し、世界的勞働運動を創始せる、哲學者にして革命家なるカール・マルクスの名は蓋し社會主義史上に於ける最高最大なる者なるべし

カール・マルクスはフエルデナンド・ラサルレと同じく、猶太人の血統に屬す、彼の祖先は代々法教師たりき、マルクスは一八一八年トレフエス(Trier)に生る、此地は彼の父が高級なる公職に在りし所なり、彼の兩親は共に高尙なる教育を受けて其人柄に關する傳說偏見を能く超越したり、一八二四年マルクス六歲の時、其家族は猶太教より轉じて基督教の信仰に入門したり。

其熱心なる剛强なる性質、其精力充溢せる身體、殆んど總ての點に於て最高なる自然の賜を享けたる若きマルクスは、當時獨逸に於て受け得べき最高の學識を頗る迅速に消化し得たり、ボン大學及びベルリン大學に於て彼は法律學の研究に身を委ねたり蓋し是れ父の希望に從へるなり、然れども彼自身の傾向によりて其多くの時間を歷史及び哲學に費したり、當時ヘーゲルの勢力は尙ほ其頂點にあり、マルクスも亦た其熱心なる研究者にして、ヘーゲル黨の急進派と共に步一步、哲學上宗敎上政治上の急進主義者となり、而して遂にホイエルバッハの人道主義に歸結したり。

一八四一年マルクスは其研究を終り、エピキュラス哲學に關する論文を以てドクトルの地位を得たり、而して是彼が獨逸大學との關係の最後となりぬ、當時彼は哲學の教師として尙ほボンに留まらんとの意を有せしが、仝大學に神學教授たる友人ブルノー・バウエルに對する普漏西使臣アイヒホルンが待遇の態度は遂にマルクスをして其目的を棄てしめたり。

▲革命文士

マルクスの革命的性質は獨逸人中の學究的の職務には不適當なりき、更に普漏西の政治的狀態は其如何なる方面に於ても自由の活動を爲すの餘地を存せず、マルクスの進むべき路は唯だ政府反對の黨派に入るの一あるのみ、此に於てか彼は大學教授の希望を棄て、革命文士の生涯に入りぬ、一八四二年には彼既に「Rheinische Zeitung」の編輯局に入る、ライン新聞はコログネに於て發行する極端民主主義青年ヘーゲル黨の機關なり、彼が此新聞の記者たりしは短時日の間に過ぎず、されど彼が此新聞に關係せる間、彼は普漏西の保守的反動に對して激烈なる戰鬪を繼續したり、其結果は遂に政府の迫害となり、新聞は之を避けんが爲に讓步を求むるに至りしかばマルクスは遂に其社を去りぬ、而も之に係らず新聞も亦た禁止の命を受けたり。

同年即ち一八四三年マルクスはイエンニー・フオン・ウエストフアーレンと婚す、フオン・ウエストフアーレンは普漏西知事の同胞たり、此結婚は最も幸福なる結合なりしと稱せらる、マルクスが革命的の生涯、貧困辛酸を極むるの生活に在りて、彼女は常に勇氣を鼓舞し、常に屈せず、常に撓まず、同情深き伴侶として其夫に侍けり。

▲巴里に赴く

是よりマルクスはコログネを去りて巴里に赴きぬ、ヘーゲル派急進黨の首領アルノルド・ルーゲ(Arnold Ruge)と共に獨佛年報(Deutsch-Französische Jahrbücher)を編輯せんが爲なりき、ルーゲはハルレ大學の教授たりしが普漏西政府の爲に其職を奪はれ、次で普漏西政府の權力を免れんが爲めライプチッヒに於て發行せる獨逸年報(Deutsche Jahrbücher)は恰も此時ザクセン政府の禁止する所となりし也、獨佛年報は、曾て民主的新聞を發行せんが爲にツーリッヒの大學教授を辭し而して民主的文書を販賣せんが爲に一書店を開始せる有名なるユリウス・フレーベル(Julius Fröbel)の發行せる者なりきフレーベルは自ら瑞西に於ける共產主義者と稱し、又た頗る急進的社會主義的傾向を有する著作を公にせり、今ま新たに表はれし此新雜誌は嚴さに禁止せられし獨逸年報の繼續として發行せられしのみならず、更に其計劃を擴張して獨佛の寄書家を之に加へ、以て兩國急進黨の團結を助けんとするに在りき、然れども遂に佛人の寄書を見ず、僅かに一年にして其雜誌をも停止したり、蓋し共產主義の問題に就て記者間に意見の相違ありしが爲也

▲青年ヘーゲル黨

青年ヘーゲル黨は此共產主義の問題に就て既に深き興味を感ずるに至りき、然れども彼等の之に對する態度は一時頗る混亂の觀を現はせり、彼等は或時は之に眩惑し或時は之を排斥したり、彼等は之を拋棄するも之を採用するも共に其宜しきを得る能はざりき、青年ヘーゲル黨たりしカール・グリユーン(Karl Grün)曰く彼等は社會主義を恐れたり、然れども、青年ヘーゲル黨は其意思に反對なる社會主義の弘通に寄與すること多かりき、社會主義が獨逸に於ける一般人の信用と贊助とを得たるは之れ青年ヘーゲル黨の最も注意し最も興味を感ぜし所なりと、抑も獨逸に於て明瞭に社會主義的の主張を公にせるものは、蓋しライン新聞を以て嚆矢とすべし、而してライン新聞紙上に揭載せるマルクスの論文は殊に之を代表せるものなりき、ジロン・レー氏曰く、吾人は敢て曰ふ、マルクスは此くも早き時代(ライン新聞時代)に於て確かに一種の社會主義者となりぬ、貧困にして而も訴ふる能はざる幾萬の人民が其貧困の爲に我が權力發展の自由を有せず、而して文明の結果を分有する能はずして呻吟しつゝある大害は、是れ彼が屢々非難せし所なり、と。

▲巴里生活の結果

マルクスが巴里に行ける時、巴里は恰も革命學專門の大學の如き觀ありき、殊に社會主義の一大發源地として急進的思想を懷ける歐洲人の齊く視線を集むる所也き、ルイ・ブランの「國立工場論」の公にせられしも、プルードンの「財產とは何ぞや」の一世を驚かせしも、皆此時なりき、而してマルクスの巴里に入るや、其交際せる者は即ち皆革命主義者にして、共產主義者はそのもとも進步的のものなりき、彼がプルードンと相會して、經濟問題を討論するや、夕より朝に亘りて猶ほ決せざりしこと屢々之ありきと云ふ、後ちマルクスが世に公にせる『資本論』中に主張せる價格と勞働時間との併行論の如きも、蓋し此時プルードンより學びし處ならん、彼が巴里に於て最も親密なる交際を結びしは獨逸亡命者なりき、有名なる詩人ハイネの如き、亦た當時此地に在りて彼と相往來する一人なりき、ハイネが其名作『Wintermärchen』の感想を得るに至れるもの、マルクス又た聊か之に寄與する所ありしと云ふ、更に巴里に於て彼が出會せし者の中、彼の生涯に最も重大なる關係を結べる者は即ちフリードリッヒ・エンゲルスなり、エンゲルスはバルメンに於ける一製作業者の子なり、一八二〇年同地に生る、彼は父の事業を習練せんが爲に一時英國マンチエスターに住居せり、一八四四年、マルクスとエンゲルスとが初めて巴里に於て出會せるの時、兩者は共に既に全然共產主義の意見を懷抱するに至れりき、而して之より殆んど四十年の間、彼等は忠實なる朋友にして且つ戰友たりき。

▲フオイエルバッハ

一八四九年エンゲルスが公にせる英國勞働階級の狀態と稱する書中に記する處に依れば、當時獨逸共產主義者は悉く皆フオイエルバッハの門弟たり、而してフオイエルバッハへの門弟は多くは共產主義者なりきとなし、人道主義は更に轉じて共產主義となれり、フオイエルバッハ自身は素より共產主義者に非ざりしと雖も、彼の人道主義は之を社會組織の上に推及して當時流行の共產主義に急轉直入すべきは當に自然の經路と言ふべきなり、人道主義とは何ぞや、フオイエルバッハ自ら自己思想の發展の經路を敍つて曰く「神は我が最初の思想たりき、理は其第二、人は即ち第三にして最後なりき、思想の野に於て神學が人類學中に神沒するは、政治の野に於て君主政治が共和政治に溶化する所以なり」と、フオイエルバッハの思想は彼の兄弟フリードリッヒの小著『未來の宗教』に由りて普及せり、其書に曰く「獨り人のみが吾人の神なり、吾人の父、吾人の審判者、吾人の贖罪者、吾人の家庭、吾人の法律規則、吾人の政府、道德、公私の生活勞働の最始にして最終なり、唯だ人に依るの外、救濟あると無し」と、而して此思想は直ちに轉じて共產主義となり得る也、孤立の人は完全の人に非ず人の天性は唯だ共同社會に於てのみ保有せらる、人と人との團体に於てのみ維持せらる、孤立は有限にして羈束なり、共同は自由にして無限なり。

▲マルクスの歷史論

カール、マルクスも亦た人道主義者なりき、彼は人道主義を以て、社會を政治的產業的に革新する生命ある原理となせり、即ち



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

是れよりして急進的革命を主張するに至りたり、彼れ其「獨佛年報」紙上に掲げし「ヘーゲルの權利哲論」てふ論文に曰く「新たなる革命は哲學に依て導かるべし、獨逸從來の革命的慣行は理論的なり、改良は僧侶の事業たり、革命は哲學者の事業たる可し、其哲學や實に「人を墮落せしめ、人を凌辱し、遺棄し、輕蔑する一切の現存制度を破壊すべき」ものならざる可らず、然れども哲學は物質的武器無くして革命を爲す能はず、而して其武器は即ち平民階級なり、斯くして其革命の勢力一たび勃興せんか、到底之に抵抗すべきもの無く、斯くして成立する革命は空想に非ざる歴史に依て認知せらる、唯一の革命のみ、他の革命は或階級の利益の爲めに或階級の作爲せる部分的の革命なりき、今吾人の主張する革命は全社會の名に依て行はる、世界一致の革命なり、蓋し平民階級は有ゆる他の階級を其内に溶化すべきを以て普遍的性質を有すと言ふを得べし、平民階級は歴史的稱號の上に立たずして人類てふ基礎に立つ所の唯一の階級なり、其患惱困苦は彼等に特殊なるものに非ず、實に廣き人類の患惱困苦なり、其要求は特別なる權利に非ず、全世界を平等にせんとの外、亦た何等の要求をも爲すに非ず、世界の歴史は世界の審判なり、金錢と智識とを有する特權的階級の支配の下に成立する社會制度は、其外部に生長する無産階級の急速に増大する事實に依て實際に其非を宣告せられ、其運命を豫定せらるゝものと言ふ可し「獨逸に於ける實際の解放は唯だ人は人に對する最高の存在なる事を説明する根本原理より出で來れる解放ならざる可ず……故に獨逸の解放は即ち人の解放たるべし、此解放運動の頭腦は即ち哲學にして、其心臟は即ち平民なり」以上の論文によりて、マルクスの自然的歴史的進化に對する信念がヘーゲルより來れる者なるを明かに知るを得べく、而して又た彼が佛國社會主義者の理想家的考案に賛同する能はざりし所以を知るべし。

▲巴里を去る

マルクスは巴里に於て三方面に對する戰鬪を繼續したり、一は近世の社會組織に對する一般的攻撃にして、二は普魯西政府に對し、三は青年ヘーゲル黨中の一派に對する戰鬪是なりき、彼はエンゲルスと共にヘーゲル派の理想主義に反對し殊にブルノーバウエルに反對して「Die heilige Familie」と稱する小冊子を書けり、蓋しブルノー、バウエルが彼を猶太人となし、急進黨となし、新聞記者となして、極力之に反對したれば也、「獨佛年報」の分裂わりし後、マルクスは自ら「Vorwärts」と稱する新聞の編輯をなし、其他彼の議論を自由に掲載する數種の新聞紙上に於て激烈に普魯西政府を攻撃し、遂に普魯西政府より佛國の宰相ギゾーに對し請問を發し、ギゾー內閣は彼に命ずるに小穩ならんことを以てせり、而も彼は長く巴里に留まる能はず、遂に追放の命に接するに至りぬ。

一八四五年マルクスは普魯西の申請に依て遂に巴里より放逐せられ、ブルッセル府に至りて此に三ケ年間定住したり、彼は之より普魯西の國民權を拋棄し、而して又た何れの國にも歸化せざりき、一八四七年彼はブルッセルに於て「哲學の貧困」（Misère de la Philosophie）と稱する書を公にしたり、プルードンの「貧困の哲學」（Philosophie de la Misère）を論駁したるなり當時プルードンの名は歐洲社會主義の首腦たりき、而してマルクスは彼と最も親密なる交誼を結べりき、然もマルクスが此親友に對する批評は實に無情酷薄を極めたり、然れども斯の如き殘酷なる論駁の風習は當時一般に行はれし所、彼も亦た此風潮を脱する能はざりしものなるべし、又た彼は之を以て眞理の爲め、平民の爲めにするものと爲し、個人的感情の爲に顧慮し讓歩する如きは彼の甚だ卑劣とする所なりしならん、此書は唯だ論駁的筆法に成りしものなりと雖とも、是れ始めて彼が意見の普遍的に記述せられしものにして彼の生涯を知らんと欲する者の頗る興味を感ずる所ならん、然れども此書は遂に世の注意を喚起すること少かりき。

▲共產主義同盟

マルクスがブルッセルに在りし時、彼は「共產主義者倫敦中央局」よりして招待を受けぬ、此團體は一八三六年巴里に於て創立せられし者、其目的は獨逸勞働者中に共產主義を傳播せんとするに在り、此團體の組織は恰も萬國勞働協會の組織に類す、其同盟員の一定數の集合ある時はこゝに一の「Gemeinde」即ち部落を創立し、同一都市に於て數箇のゲマインデが集合する時は此に一の「Kreis」を組成す、更に數箇のクライスは其中の首たるクライスの周圍に集まり、而して其全体のクライスを統括する所の者は即ち中央局にして、總てのクライスより選出せる代議員の總會に於て之を選任するものとす、其中央局は一八四〇年倫敦に定着せらる、彼等はかくの如き方法を以て其手の及ぶ限り何れの所にも獨逸勞働者の改善團結を設立せんと欲したり、此の計劃は常に旅行を事とする獨逸勞働者の慣習に依りて容易に弘通せしめられ而して多の團體は瑞西、英國、白耳義、亞米利加等に於て設立せらるゝに至りたり、マルクス自ら語る所に依れば、共產同盟中央局が彼を招待するに至りしは、彼がブルッセルスにて公にせる小冊子に基けり、即ち其中、共產同盟の秘密の教理たりし獨逸哲學の曖昧なる點を酷評したればなり、而して更にマルクスは曰く此運動は普及的方式を以て行はれざる可らず、即ち空想的組織を實現するの目的を以てせずして、勞働階級其他の諸階級をして其眼下に推移しつゝある社會の歴史的變遷の進行に自覺的に關與せしめんことを目的とせざる可らず」と、又たマルクスの考ふる所に依れば、此れ唯だ原理の一點のみ、更らに此同盟は其手段と戰術とを變せざる可らず、其運動が社會的革命たる以上は、昔の政治的一揆及び秘密結社の運動と自ら異るもの無かる可からず、時代は既に變じたり、新たなる武器は新たに供給せらる、社會的革命は大なる準備を要す、全体の人民をして先づ全然其根本原理に結合せしめざる可らず、故に第一に行ふべきは輿論を教育し動かすに在り、此運動に於ては通常の秘密結社の如きは唯だ一小手段に過ぎざるのみ、新たなる革命は廣大なる組織を以て行はざる可らず、共同の世界的革命を開始せんが爲に、全歐洲の人民を激せしむべくペンと舌を以て活動せざる可らず、約言すれば、マルクスは產業の大組織を以て兇徒嘯聚の戰術手段たらしめんと欲せし也。

此意見は「共產同盟中央局」の採用する所となれり、而して中央局はマルクスに對し一八四七年倫敦に催すべき其總會に出席せんことを請求し來り、彼は之を承諾して出席したり、彼は數週間に亘りて熱心なる議論を爲せし後、遂に其大會の議員を說服して彼の有名なる「共產黨宣言」を採用せしむるに至れり、此宣言がマルクス及びエンゲルスの共同して起草せしものなる事は世の既に知れる所、其後英、佛、丁、伊、諸國語に譯せられて、恰も一八四八年の革命前に於て廣く各地に頒布せられたり、日本に於ては去る明治卅八年十一月平民新聞紙上に譯載せられたり、堺利彥、幸德傳次郎二君の共譯に係る、平民新聞は此譯文の爲に發行禁止の裁判を受けぬ、「共產同盟」は實に今日現存する世界的社會民主黨の最初の團體なりと言ふを得べし。

▲新ライン新聞

一八四八年佛國二月革命の爆發するや、マルクスは何等の理由なくしてブルッセルズより放逐せられたり、而して巴里の假政府より佛國に歸來せよとの招待を受けぬ、彼は此招待に應じて行けり、然れども巴里に居ると僅かに數週間にして獨逸の三月革命起りければ、彼は其革命の舞臺へと急ぎたり、同年六月一日フログネに於て彼はフライリグラート、ウオルフ、エンゲルス其他の同志と共に「新ライン新聞」を創刊せり、是れ實にライン革命運動の中心にして、當年の獨逸に於て重要なるもの、一なりき、若きラサルレの如きも此時初めて革命運動の表面に現出したり、十一月のクーデター普魯西議會の解散あるや、新ライン新聞は激烈なる語を以て人民を勵ませり、曰く、「租税を拂ふを止めよ」曰く、「威力に應ずるに威力を以てせよ」且つ彼等は各處の好紙面に挿入するに其實行の勸告を以てしたり、之が爲にマルクスは一揆教唆の件を以て二回の告發を受けたりしが、何れも無罪として放免せられぬ、然れども一八四九年五月ドレスデン一揆起るや、新聞は遂に行政廳の爲に禁止せらる、六月十九日、乃ち其終刊號は赤色印刷を以て現はれぬ、フライリグラートがペンに成れる「さらばよ、新ライン新聞」てふ詩が同紙の讀者を感激せしめ、泣かしめしと、夫れ果して如何なりしぞ。

（未完）

▲石川生曰く、本編は前號に掲げし「無政府共產主義大成者クロポトキン」と同じく「西洋社會主義史」の稿中より摘出したるもの、今後三回ほどにて、本編の梗概までを終るべし



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

小説

# ◉魔

モーパッサン
二葉[illegible]電 譯

五月八日

肌ざわりのよい朝日の光を浴びて庭の芝生に臥て見る。氣持ちのよい朝だ。仰向ひて見ると頭の上には甘蕉の青葉が蔭を作つて居る。

此地の景色は馬鹿に私の氣に適つてしまつた。だから暇さへあつたら此地で暮らしてるのが何よりも愉快に思ふ。

人間と云ふ奴は妙な感情に支配せられる。先祖代々から住み馴れて來た土地は例へ少く／＼よくない所でもどうも棄て難くい。それは其邊りの人々の思想や風習や食物や又特有の方言などの關係もあるし些末なる土塊の香りや空氣の味ひ迄も何となく一種特別の好感を起さす傾きがあるからだらう。だから私は私が生み落とされて以來今日が日迄も暮らして來た此家が馬鹿々々しい程も戀しく懐かしい。敢て此家が立派だからと云ふ理由では無論ない。此家の窓からは美しい「セーヌ」の流れが庭を越えて見渡さるる。此静かな洋々の流れには彼の「ルーアン」及び「アーヴル」の兩都市も其影を浸して居るのだ。

悠々とした大江の流れは滑ぎ上り滑ぎ下る數知れぬ「ボート」の爲めに静かな面を乱されて居る。

家から左方に當つては下流の對岸に「ルーアン」の町が遠く見えるぞ。其町はゴシック風の尖塔が林の如くに突き立つてる下に美しい屋根を連ねて建築られて居る。禮拝堂に管理されて居るこれ等無數の美しい塔からは水の様に澄み渡つて居る朝の空氣を震はして消いく／＼鐘の響きを遠く私の家迄も傳へて來る。風の方向に依つて或時は近く聞える事もあり又馬鹿に遠くに聞える事もある。

今朝は何だか勝れて氣持ちがよい。

十一時頃に一隻の小蒸氣船が一列の小船を曳船して流れを下つて行つた。私の家の前を通る頃にムク／＼と吐き出してる煙の中からパツと一條の白氣を吹いて過ぎた。船體が隠れる頃にやつと一聲ボーツと汽笛が耳を打つた、間もなく最后の曳船も隠る。

紅旗を高く飄へした英國の帆船が二隻並んで行き過ぎた後ろから直ぐとブラジル國の三本檣の大帆船が滿帆に風を姙ませて流れを亂して上つて來る。純白に塗られた舷が旭日を照り返へして非常に美しく輝やく。何故か覺えず私は其船に挨拶した。何故挨拶する氣になつたかは自分乍ら分明らない只其船が極度の快感を私に與へて呉れた事だけは確かである。

五月十二日。

此數日來風邪の氣味であつたが今日は大分惡るくなつた。從つて頭腦の工合が甚だよろしくない。ボカンとして居る間に何時とはなくてんな事を考へて居た。

全體此世で我々の幸福を滅茶々々に打ち壊はしてしまい我々の自信力を押し潰ぶして懐疑に陷らす様な魔力は何所から來るのだらうか。多分それは見る事も出來ない一種不可解の魔力を持つてる靈氣の作用だらう位に人は云つて除けるかも知れない。而かし私はどうもそんなに手輕るな解釋に滿足する事は出來ない。

私は今朝は余程上氣嫌で起床した。朝の清らかな空氣を吸つて思ふさま歌はうと考へ立つて「セーヌ」川に沿つて岸邊を下つた。一二町計りも來たかと思ふ頃突然何だか大不幸が家に待つてる様な氣持ちがして急いで引き返へした。返へると同時に私は水を浴びせ掛けられた様な惡寒を感じて神經も麻痺して仕舞ひ全身の血行も一時に止まる様に思はれた。眼には悲劇が掛つた樣で五色の珠がチラ付く。思考力も何も滅茶々々にされてしまつた。無氣味千萬な魔力が私の身邊を取り巻いて居る様な感じがして思ひも依らない種々雜多の現象を見せ付けられる。正體も知れないものが私の身に觸れたと感ずる事もある。無感覺の間に色々の事柄を行なつて居る。不審議千萬な事ばかりに遭遇した。

此れ等の奇妙な現象は私の肉體に機能に思想に果ては心靈に迄すらも怪しい結果を殘した。

其出會ふた種々の現象と云ふ奴が可成り神秘的のものだつたものだから憐れな程不完全な人間の五官では到底何者とも知る事は出來なかつた。

一寸序だから云つて見る迄だが全體人間の感官器程憐れなものは世間に余り多くはない。其眼は遠過ぎるものも見えないし近過ぎるものも見えない。月界の住民を見得ないと同時に一滴の水中に微動する無數の有機体をも認むるを得ないのだ。又耳は單に大氣の震動に過ぎない現象を高調な音として傳へて來る。要するに耳と云ふ奴は大氣の震動に過ぎない現象を音と云ふ別種のものに變化さす怪物の樣なものであるのだ。而かし此怪物の働らきのお陰で寂滅の自然界を音樂化する事も出來れば音樂を樂しむ事も出來るのである。云はゞ怪我の功名とも云ふ可きものだろう。嗅覺と來ては頗からお話しにならない。味覺はやつと酒の善惡を味ひ分ける事が出來るに過ぎない位のものだ。

我々人間が五官の外に何か一種の完全な機能を持つてる靈官器を備へて居たなら色々の面白い新事實が續々我々の身邊に發見するだらうに。

五月十六日

とうとう病氣にやられた。それが又大變な熱病と來て居るのだから體は衰弱するし神經は過敏になるし絶えず何だか身に迫る危險に恐れを抱いて居た。

此熱病は何か大仕掛けな病氣の前徴ではなからうかと云ふ様な考へも浮んで來る。此れ等の不要ざる心配で精神狀態は益々病的になつて來るばかりである。

五月十八日

連夜の不眠症に閉口の結果今日は我慢の緒を切つて醫師の診察を乞ふた。醫師は勿體振つて診察の後に脈膊が非常に高くなつて瞳孔も散大して居るし精神も余程興奮して居るから要心する方がよい而かし左して險惡な症候はないと云ふた。私は今日から灌水浴の勵行と「カリユウムブロミード」の服用とを命せられた。

五月二十五日

前日と大した變りはない。病症は益々珍妙になつて來るばかりだ。晩方になると何とも云はれぬ苦腦を感ずる。それは恐らく垂れて行く夜の幕の彼方に恐れが潜むと感ずる私の心の作用に原因するのだろう。

私は大急ぎで食事を濟まして後に讀書して見たけれど何の事だか薩張り分らない。それ所か終るくすると文字すら分らない程だ。思ひ切つて讀書を中止して只目的もなく更衣室を歩き廻つた。其間にも就眠と就床に關する心配と恐怖とは絶ず心を腦ました。

十時頃ピク／＼もので部屋に上つて行つた。部屋に入るや否や大急ぎで戸を二重に掛けた。何とも評し様のない氣味惡るい感じがして恐ろしくて堪らない。其癖今迄は別段何とも思つては居なかつた部屋なのだ。押入れを開けて寢床の下を覗いて見た。聞き耳を立てた。何の爲めにこんな事をしたのか自分でも分らない。自分乍ら變な事をしたものだと思ふ。鼓動は高まつて來る、血液は逆流する。多分神經の興奮血液の充血及び身體諸機能の小障碍の爲めに輕快な精神狀態は一變して發熱に化せられたのだ。其結果非常に臆病になつたものと見える。兎も角も寢床に入つた一分間も早く寢入つて仕舞うと煩悶する。早く寢ようとあせればあせる程目は冴んで來て神經は益々過敏になる。心臓は激しく鼓動して來る脈動は狂ふ。遂には全身夜着の下でわな／＼と波を打つて震つた。

こんな狀態に苦しんで居ると不意に睡を誘へて深淵に石を抱いて靜かに沈み行く時の心地がして次第に氣が遠くなつて來る。此睡に陷つた。何も辨別出來なくなつた。強制的の睡眠は怪しからぬ魔力で私の心を左右し目蓋を閉ぢしめてしまつたのだ。二三時間も眠たかと思ふ頃夢を見た。夢を見たと云ふよりも寧ろ惡夢に襲はれたのだ。

私は床に入つて熟睡して居る。これだけはわり／＼と自分に意識出來る。それから一人誰れとも知れない者が自分の傍に近寄つて來る。私の寢姿に見入つて居たがツト近寄つて手を觸れる。寢床に上る。胸に乘るそう／＼首を握つて締め付ける。力一杯締め付けられて苦腦は絶頂に達する。もがきにもがくけれども強力に締め付けられて手足は麻痺する、助けを呼ぶにも聲が出ない。動かうにも動かれない。寢返へりを打つて此奴を一つ投げ飛ばしてやらうと思つてもがいたが駄目だつた。觀念の眼を閉ぢて覺悟をする。目が覺めた。身内はガタ／＼と震つて汗で總身浮くばかりである。蠟燭を點火して部屋中隅なく見たが別と何の變りもない。部屋には只私が一人居丈である。

此怪異は其後も夜毎に顯はれる。一夜に一度苦しんだ後は平靜に曉迄熟眠出來る。一夜に二度とは決して苦しめなかつた。

Digitized by Google



Original from CORNELL UNIVERSITY

# 放浪（四）

ゴーリキイ著　尾祈生譯

フエオドシアでは吾等の希望は全く欺かれて了つた、既に數百の勞働者が、同じく職業を求めて、埠頭建築の觀覽事でも滿足するといふ趨勢であつた、其處に集まつてゐたのは、土耳古人、希臘人、グルジー人、スモレンツ人、ポルタヴ人や國籍のない放浪人で、町の內外は到る處……饑餓……の爲に灰色の顏や窶つ面した人に滿され、而してアゾヴイヤタウリの浪人は、狼の狂ふやうに飛廻つてゐた。

蕃人はこれが爲めに饑餓の谷に墜落され、パタまで强請られ、零落したのみならず、パタまで强請られ、零落してゐる放浪人はシヤクローの所に押寄せて行つて、私の買つて與つた外套を彼の肩から掠奪くり、而して私の佩帶を引裂いた、然し彼等と吾等とは精神的に或は肉體的に地位は同等なので、少時く爭論した後ち、再び物品を取返して了つた、狡猾な畜生としての放浪人は名譽ある國民である。

『働く仕事がない、兩人が居なくも埠頭を建築するには差支はなからう』と思う考へた時は、何となく侮辱されたやうに感じたので、此處を去てケルチユの方へ轉じた。

友は話を仕懸ては私の働事に行くのを妨げたが爲めに、彼は空腹といふ難有い報酬を得た、ダルヤルの谷（カスベクの麓）のやうに爵發込で、飯を食ふてゐる人を見ると狼のやうに齒をギリ〳〵鳴し、而して大物食ひの彼は通帳で私を絕望させて了つた。

其後彼は婦人のことを想起しては、哀れな大息を吐き、絕えず東洋人のやうな奇妙な笑方をしながら婦人を見ると年齡や容貌の差別なく、哲學的論議のない駄洒落で、彼が何うの、此が彼のと婦人の容貌の特長を鑑定家のやうな態度で、不思議な論評を擧げて批評した、一度私が、婦人は天造物だと說明すると、彼は侮辱されたと感じたのか、酷く激したので已むを得ず彼が滿足してゐる時に私の意見を試みることにした。

ケルチユに行く時は、海岸を通らず、野原や山を廻つて可成く近道をした、佩嚢の中には韃靼人に買つた三錢の麥煎子のみで此の淋しい、心細い境遇は、ケルチユに到着て不適當な職業を求むる準備ではなくて唯だ脚を勵ます爲めなのだ、シヤクローは一里パン一片も貰ひ出さず、彼の狂言は一つも成功しなかつたので、斥別で簡單な皮肉を云ふのであつた。

『深山！……』此の言葉は大眞理であつた、世事辛い年は、一片のパンを爭ふ人が數く、彩深山ある、彼等は小供を抱いたり、負つたりして、二十人、三十人づゝ一部になつて行く、而して飢餓の爲めに皮膚の色は淺藍色を帶び、底を血が循環つてゐるやうにも見えず、何時も病身らしく、腐敗て濁つた膿汁……而して骨は角ばつて著るしく皮膚の下に突出し、鬪悶しい恐怖が呼懸つて、若い老衰が彼等の心臟を啖つてゐた。

餓て、腰は起ず、…には疲れ、小供は氣力衰えて悲鳴を歔め、彼等は鋭い眼色で絕えず彼方此方を覗き、刈れた麥畑ではなくて、穀物の方に貪慾の眼を閃めかしてゐた、彼等に若し勇氣があつたら贓を棄者の方に向け、而して愆な疑問が現はれるのであらう……吾等人類は何故に此の世界に生存するか…………

馬車が一空土煙を捲いて進んで來た、其中には骨格の逞しい老婦人が座つて、手綱で馬を馭してゐたが、悼しい眼色と印象强く沈默してゐる小供の群に圍まれた、骨擽き馬は迷く疲らされて、逆立た者に搔擽つたやうな蔽い搖擺させながら、悲しさうに辛つと足を運んでゐた………小供は馬車に進み寄り、嚴肅に頭を旋げ手を垂れた……恰度鞭の紐のやうで他哀はない、活氣のない鈍く放心した眼は、饑餓に對する熱病の光なく、唯だ言ひ難い戰慄の悲痛に充ち、偸むやうに、徐々に、靜かに、悄々他國の土地を去つた。

彼等は悄々出會した……死骸のない送葬の行列……………彼等が出會すか或は追付いたりすると、底解で羞遊むやうに『村まで未だ餘つぽどありますか、若衆！』答へてやると彼等は歎息を吐き、吾等は默つて互に顏を見合すのであつた。

私の同伴者は、乞兒仲間の克難い爭論を慫ふことが出來ず、遠くから彼等を見ると忿く。

『左樣なら、亦お目に懸りましよう、フヽヽ！何方にお出です、何方に？、露西亞の方ですか？面白くないね！露西亞の愚民！』

露西亞の愚民がクリムの方へ行く原因を說明したが、彼は深く疑つて頭を振り。

『解らない！左樣ぢやあるまい！………阿呆共はグルジンに來なければ可いが』

吾等は酷く疲れ、腹を空らして、ケルチユに達たのは夜更てゞあつた、海岸にある渡船と陸に懸つてゐる橋の下に何者にも妨げられず寢た。

流れ行く國民……放浪人は警察の手に落るのを恐れてか、吾等の來る少し前にケルチユを去つてゐた、而してシヤクローが外國の旅行劵を持つてゐるので、此が吾等の運命を危險な地位に導くのだ。

海峽の波は慈悲深くも、終夜鋭い水を浴せかけ、東の空が灰色になると橋の下を出て、終日海岸に沿ふて歩いた、何を食ふか……ボペドヤ婦人に、市場から砂糖袋を運んでやつて貰つた、グリフエンニックがあつたのでそれを食ふて步を移した。

多くの人は海峽を橫つてターマンの方へ行く、唯だ一人の舟子も吾等を渡手にして向ふの岸に渡して與れる者がない、口を酢くして賴んで見たが、吾等よりも前に此處に來てゐた[illegible]連が其任に當つたので、放浪人の希望は全く水泡に歸し、理由なく拒絕されて了つたのである。

私は窮に決する所があつて、吾が逆境を憤り、前途を呪ひ、或商估に付いて慨き而して夜の闇人と共に其の密行を始めた。

## ●新紀元晩餐會

小野有香

新紀元晩餐會記事の本紙に其影を隱してより既に幾月、如何に待ち侘びられし事なりけむ。而かも之れより切なるものあり石川兄の無事出獄これなり

十有三ヶ月間の禁獄！

血淚多き吾人、わけても自由の大氣を呼吸すること深く、流遊にして而かも滿身維新の氣象の同兄にとりては、如何に世事百般の技癢に堪へず、權力階級の跋扈に對して憤慨の念に堪へざりけむ。

同兄や素、冰柳の質、薔猶小關き獄裡の寒と暑、差もわらであれかし、暫しは觀念の眼を閉ぢて大自在の翼を休めよかし、而かも期滿つるや熟眠より醒めたる猛獅の容して出で來らむことを祈り且つ待ちにし我等同人の微衷は、幸なる哉期待に勝れし肥滿の雄姿、我等同人の觀るは、さる事ながら同兄が不自由勝なる獄裡の攝生努力、常に欽すべく服すべき也。

無事の出獄歡迎、延びに延びし新紀元晩餐を兼ねて、玆に樂しき集會を催すべしとて六月の五日は特に我等に與へられぬ。

二十有餘名への案內狀、會するもの安部先生、宮崎（民藏）老兄、逸兄、赤羽、戶恒、神崎、平岡、景山の諸兄、逸見夫人、前田女史の兩姉：之れに石川兄、福田老姉と余とを加へて十有三名、恰かも兄が刑期を象りたるもの、如く、各人の竹向を月に配すれば或は面白きものあらむ。

木下老兄は三河島の田舍に引籠られしかば集るに由なく、橫田兄病未だ全く癒えず空しく病褥を擁して沖南の地に悵然たるは共に遺憾の極み。

午後五時の集會、六時の晩餐、此日は例も異りて卓上の花卉裝飾、簡なれども而かも情味あり、流石は福田老姉の趣好とて偖ならざりしぞうれしき。

談話は何に始まりて何に終りしか、多樣多岐にして詳記しがたし。唯だ深くも我等同人の腦裏に染みて忘るゝ能はざるものは、宮崎老兄が十地復權の大意見を抱きて歐米漫遊の途に、さなり今より凡そ數年前の事とかよ、各地の社會黨、革命黨、無政府黨の各名士等と會見したる事ども、さては其名世界に隆ける彼等が風丰、其質朴なる、其粗樸なる、且つは燦々たる其眼光の樣なるを聽きては親ら其人に接するが如く、一揮いふべからざる懷かしさと畏敬とを感じ其秘密出版所、秘密集會所などの事を聽きては彼等の苦心、彼等の覺悟、彼等の事業の如何に興勢にして又深刻なるかを偲ばしめぬ。

語る者往時を追懷して坐ろに感に堪へざるもの、如く、聽く者恍惚として忘我の境にありき。

石川兄が獄內の生活、狀態、時に滑稽を催さしめ、時に噴飯せしめぬ。兄に幾冊か大の社會主義史草稿あり、之れ兄が牢獄生活より我らせる物質上唯一の土產なり、中に一冊其遣る瀬なき雅懷を遣りたるもの、詩歌の才侮るべからざるものあり。即ち其一首を摘記せん

芝生蒼き大獄庭に囚徒二千
赤衣の一揆、勢揃ひする

安部先生とは久し振りの晩餐とて興は彌や盡きねども、又の日を期して、十時前散會。



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

## 毒婦の研究

瀬尾雪波

日本婦人の性格を研究して尤も痛快に感ぜらるゝは毒婦と云ふ一族である、婦人と云ふものはかよはき者、可憐なる者と感ずるのが通例であるに之が男子も及ばざる動作を演じて居ることは不思議である、西洋にも此毒婦種族があるか無いか調べて見ないからナニとも曰はれぬが日本には殊に澤山に出たやうに思ふ。

何故に毒婦は毒婦として立つに至つたか先天的に毒婦で生れたのか、此邊は研究して見た上からでなくては分らぬ、兎も角も日本國に生れた女子にして其最も活動性を帶びたるものが本來の活動を壓抑された結果反動をしてかゝる毒婦となつたものたることは證明せられて居る。

之を男子に見ろも智力、體力、權力、凡てが完足した活動的巨漢が家庭の情態や國風時世やに依て其活動を妨げらるゝやうになつて居る時には常に不安である、原田甲斐が不忠の臣であることは明かであるとした所で直ちに惡人であると斷定し去る可きであらうか、甲斐は確かに活動の人であつたと信ずる、奥州一國を押領して存分の政治を試みんと計畫した者に相違ない、彼は活動がしたさに惡人となり不忠の臣ともなつた、世に誤解せられて居る石田三成も活動的の人であつたに相違ない。

德川幕府時代には有爲の男子が海外に驥足を伸ばすことが出來ぬ、等しく國内では戰爭も起らず、才力、知力、辯力、體力の充塞せる面々は世の中が馬鹿馬鹿しくてたまらなかつたのである、彼等は此馬鹿馬鹿しさに辛棒がならずして亂を發したのである。

翻つて婦人の方を見るに婦人程束縛を受けて居る者はない、毒婦の種族は活動せんが爲に發生した者である、加ふるに日本の婦人は男子より玩弄物視せられて居る、一擧一動も男子の許可を待つて居る、名は夫婦で結構の至りであるが實は主從の關係である、毒婦或は之に類する婦婦の一連は世間の習俗の馬鹿馬鹿しさに辛棒がしきれずして毒婦となつたものである。

毒婦は十中の八九分迄容色に於て勝つて居る、即ち容色を以て巧みに男子を籠絡して凡ての物を掠めて脫走するにある、毒婦の前には凡ての男性は人形と異なる所はない、蓋し痛快と云ふ字を此邊に使用して宜しからう、此くして强慾なる富豪の徒を襲擊して懊悩せしむる所實に小氣味よき感想を吾人の胸に起さしむ、吾人は常に毒婦を惡んで而かも毒婦の芝居を喜ぶは何の故ぞ、只此の小氣味よし、痛快也の二點に歸するのである、之を故菊五郎や源之助をして演せしむる時に滿都の士女をしてウナラシムと云ふに非ずや。

社界に蠹毒なる一族あり、最も多く男子に接するものなり、藝者に接する男子の如何に就ては一概に論じ難きも大凡そ『威力』本位說を奉ずるヤクザ者にして此徒は常用手段として『威壓』を用ゆる者であるや、女子の本念は弱しと雖も未だ『威壓』に默從するものではない、即ち僞飾を以て男子を翻弄し自ら快を買つて居る、之亦痛快の極であつて之丈けの所作を藝者に許容しなくば彼等の心情は必らず悲哀の深淵に沈沒するであらう、知るべし彼等が一面に於て翻弄のアラユル手段を盡くして一面に於ては俳優を買つて其天來の性慾を滿足せしめつゝあることを。

藝者其他傳法肌と稱する婦人が更に進化して其性來の活動性を實現したるものが毒婦である、是に於て平瀨や又……蝮の……雷……稻妻……三日月……等の毒婦を輩出したる日本は婦人の活動力の充足せるを稱して餘りがある、然れ共今日の杓子定木的女子教育で、有爲奔放な活躍的女性が現出するかは疑問である、吾人は寧ろ毒婦の不敵なる活動の跡を研究して大に習ふ所あらんとす、只其活動の法律と觸るゝ點に於て常識の判斷を待つのみ。（完）

## 空裡光

「愛」――と――「罪」

南無百南無十讀人

昨年四月廿五日、僕は平民新聞の筆禍に逢ふて巣鴨獄裡の人となつた、爾來夏去り秋と過ぎ、氷の冬を透して、東風豚々の春の名殘も惜まるゝ五月十九日といふに、僅かに蒼龍窟を脫れて再び此娑婆に生還することを得た。

獄中生活に經驗の無い人は想像も出來まいが、一度獄に入りし者の最も苦痛に感ずる所は、其一切の事物の單調なるに在ると思ふ、其單調さ加減と來たら仲々形容も出來ぬ程で、眼も耳も鼻も口も毎日〳〵千篇一律の感覺を以て麻痺せしめられる、其れ故、鳥の聲、虫の音、雨だれ、風までが、獄裡に居ては到底經驗の出來ぬ程の快感を與へるのである、殊に僕は、十三月間、唯だ獨り同一の室内に閉され、平生嫌いな小虫なども、逐々坐邊に逍つて來ると、其が如何にも可愛らしく感ぜられ、我が無聊を慰めて呉れるので、恰も親しき友の來訪に接した樣な感がするのである、況して雨雪積きで久しく戸外運動も出來なかつた時などは、アチコチに囀り飛び交ふ雀やら、さては一日生命を陽光に照さるゝ蜉蝣子までが、何となく甚しく嬉しく感じられる。

今年三月最末の頃であつた、久しき間の雨や雪や風の爲に鬱陶しく心地惡しき日が幾日も引續いた後に、一日晴天、朝より日光が輝いて、吾れ人も甦らんばかり心地よかりし其折の事、例の通り午前十時頃、看守君の警護の下に庭に出て三十分の運動を了した、暖き太陽の光に浴し、柔き微風に頰のあたりを撫でられつゝ、北に行き、南に還り、芝生の上に、檜の木の下に、松の木の傍に、十間に三間程の長方形の庭中を、足の向ふに任せて逍遙して居た。

かくて我は囚はれの身をも忘れ、何時しか心恍惚として其春光和陽中に羽化し去らんと思はれし時、何方よりかヒラ〳〵と飛んで來た一羽の小さき胡蝶がある、是れ今年初めての御姿ぞ、菜の花の色に似た稀るばかり美はしき羽の動きを止めて、今や暖い毛氈の樣な芝生の上に靜に息ふた、此の優しい胡蝶の姿がヒヨット僕の眼に這入つた時、僕は何とも言得ぬ快感に打たれて唯だ『あゝ、可愛い！』と我ながら堪えられず心に叫んだ、其時、我が足は早くも其芝生の上に立つた、我が兩の手は早くも此可憐の子を襲ふのであつた、小さき胡蝶は忽ち驚いてヒラ〳〵と飛び立つた、其時、其刹那、僕は僕の心臟に突如として强い深い一打擊を受けたと感ずるや、僕の良心はパツと閃めける一種の靈光に直射せられた、同時に僕は『アツ罪なことを……シマツた』と心に叫んだ、其間に胡蝶は何處にか其可愛い姿を隱して了つた、唯だ此一瞬の間、我は夢見し心地しつゝ、更に醒めたる心地しつ、莊由か古の夢さへ思い出でられた。

一切の人事、一切の世事より隔絶せられし囚徒の感性は甚だしく銳敏になつて居る、そして外界内界の現象が一々明瞭に深刻に我感性を刺激し、意識中に入るのである、故に此時、僕は自分の作用を種々に考へて見た、先に『あゝ、可愛い』と云ふた心は即ち後に『あゝ、罪なことを』と叫んだ同じ心である、愛といひ慈悲といふは此心の事であらう、足の走り、手の襲いしは、煩惱具足の僕に當然發りし執着、我慾の發動であらう『あゝ、可愛い』と思ひ込んだ時、僕は既に一歩を妄執の夢路に踏み込んだのである『あゝ、罪なことを』と叫んだ時、僕は僕自らの惡魔の姿を省みたのである、あゝ『愛』は實に人を迷はすものである、愛の極は罪である、惡魔は愛の影法師である、愛が天地人生を支配して居る間は、惡魔の影は決して此世を去らないであらう。

愛は心靈の極致では無い、心靈は本體に非ずして寧ろ其發用である、されば『愛』といふとは宗教の第二義門に落ちて居る、胡蝶が驚いて飛び立つた時、僕の心臟に强く感じた其打擊の本體、突如として閃き入つた其光明の實質、是れ抑も何物であるか、予は自ら名の命ずべきを知らぬ、假りに之を空裡の螢光とでも稱すべきか、眞に空々裡の無礙光である、グレと我等如き凡夫にそんな六ツかしい事の分らう筈が無い、昔死んだ兒の年を數へる樣な事をすると、『痴人猶屎夜塘水』など、叱られるからコヽでヨす。

## ○同志の手紙

▲平岡仙兩氏（近江日野町）　世界婦人、毎號御高見拜讀し何等御伝も不申上、慚愧の致りに候……內容の精爾なる今更ながら感服致し居候、世の綱口的三文雜誌が積徴し能はざる本誌の特色は寸筆の日々蓄物のエンゼルとして尊重致居候、卑生の深む處は今暫し日本の國情否日本婦人の讀物として層中に入り易き調和ちがたき存居候、婦人の市居ろは妄想にあらずんば猥雜の外なし、謹言

▲幸德秋水氏（土佐中村町）　今世界婦人二冊受取つた、スバラしい物だ、クロ氏がアレだけに日本に紹介されたのは今度始めてだ、淚の出る程嬉しい、深く〳〵君の勞を感謝する、パンの略取の要點も警句も大体洩さず載せられて居る、眞くアレ丈けにまとまつたものだと敬服に堪えぬ（石川宛）

▲田中正造翁（古河町より）　雜誌『世界婦人』は婦人のもの、今後に、男子も容易に分り兼ぬる高尚の議論を以てせば、見るもの驚愕して止まんか、この憂を懷したる人もあります、右御參考

▲宮本熊太郎氏（釧路）　御無沙汰申上ました、不相變御奮戰の程御察申上ます、此際に於ける石川氏の無事御出獄大慶になじます、貴姉も定めて御心强く御感じでせう本月分貴誌上石川氏の長論文、吾々研究者に取り有益なる好資料さ拜讀いたしました

▲革田命作氏（匿名）　過月は又印刷の件に付非常に御困難遭遇を被成候由、貴殿の御奔走に依て恙なく廿五號もかく發刊して發行の運びに致り候らいしは野生の尤も歡喜するところに御座候

▲坂本清馬氏（熊本評論社）　岡田さん暫らく失禮いたしました、石川さんも出てきて大變賑やかになつたでせう私はノズ〳〵して居ます、急に文なんか書き初たものですから頭の方は益々惡るくなる許りです



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

[illegible]定めし呆れて御居でのことと恐察して居ります、併し、未熟な女子の事とて御寛容ありてドウぞ増々御寄稿の程祈り上ます。

[illegible]不體裁を極め讀者諸君に面目なく、且つ石川兄に對し御詫びの申上様もなく、恐縮千萬に候、編輯部で更に印刷主任と共に御詫申上候

## 雜誌管見

▲生活難の大敵（婦女新聞）　生活難の爲に社會、個人、家庭の上に悲劇惨劇の相殺で生起するは近時の惰勢である、と此様なる『婦女新聞』は能く此の社會の急潮流に着眼して此社說を掲げて居る、曰く

「顧序の大通りに貧家の札を見ること今日の如く頻繁なるは、記者が未だ曾て記憶せざる所なり、日刊新聞紙の三面に、悲慘の出來事を見ること今日の如く多きは亦記者が未だ曾て記憶せざる所なり、是等は、何事を語るものなるか」。

「生活難の襲來は、吾等の說明するまでもなく、幸所の戰士たる婦人諸君が最もよく知らせらるゝ所ならん、さて、之が防戰策は如何、武器は何」

「從來の婦人は、物質に於ては大なる責任なく、單に消極的に儉約を守れば可なるの狀態なりき然れども、生活難が今日の如く急迫する時代に於ては、消極的儉約のみにて最如たるべきにあらず、事情の許す婦人は何の内職にても、何の副業にても可なり、進んで積極的勤勞に服するを要す」

「奮鬪せよ、勤と儉とを武器として、汝の良人を助け全力を盡して奮鬪し、以て最終の大敵を擊退せよ」

生活難に着眼せられたる處、如何にも巴標の様に思はれましたが、「勤と儉とを武器として奮鬪せよ」に至りては如何にも子供らしいではありませんか、マア少し考へて御覧なさい、日刊新聞の三面記者を煩はす泣に立ち至るといふのは、婦人の方にはロク〳〵の事なのですよ、「勤と儉とを以て」など、辞して居らるゝのは一ダ〳〵浮世の辛さを味つた事の無い方の御說法です、其位の事で此難關が切り抜けらるゝものなら、誰か斯ふ馬鹿らしい、生きるの死ぬのと騒ぐものですか、私共の眼から見れば、世の中が此様になつて來たのは、一朝一夕の事では無いのです、言を換へて申せば、今や當に社會の組織を根本から改めねばならぬ機運に差迫つて居るのです、ですから、若し之を社會問題として論ずるなら、其根本的改革の方案を提供するが當然でありませう、處が「婦女新聞」のは社會問題としてゞは無くて、家庭に於ける婦人の個人的問題として之を論ぜられたのです、が、之を個人的の問題として婦人に一警告を與ふるにしては、今一歩深く踏み込んで、人生々活の根本義を擒へ、永住安心の第一義を開示して戴きたいものと思ひます。

▲熊本評論（廿五號）　創刊一周年紀念號として特に増刊盛裝して發行せられました。「過去の一年間」てふ社說中に曰く

「抑も社會革命の其たる山岳を踏破し、乾坤を一擲する底の豪傑兒の掌中にあらずして、平民自身をして之を爲さしめざる可らず、[illegible]時ありて雷風を呼び、時ありて讀書三昧に入る、革命家の胸懐なり、過去の一年間に於ける吾人のこと、亦敢て狂に過ぎ、愚に近きの事多かるべしと雖も、吾人は常に革命の流れに棹して自信の道を辿り、曾て俗に習はざらんを勉む、[illegible]を探る時なり、取るも時なり、一ヶ年を以てするも亦時なり、熊本評論社の一ヶ年を以て吾人豈に能く事終れりとするものならんや」

熊本健兒の英氣や察すべきであります。

▲亂雜不取締（東京社會新聞十一號）『社會主義を鄕とし俠骨を錬とす』と銘打ちて現代資本家社會を明觀縦開しつゝある同志は去月廿五日發行の紙上に右の如き標題の論文を掲げて、先づ「今の青年に元氣なきは青年の罪にあらず……今の青年は實に教育と社會と政府とにイヂメ殺されんとして居るのだ」「從て社會が如何に腐敗しても社會は是れを救ふの勇士を得ることが出來ない」と論じ一轉して曰く

さらば社會の前途は唯だ絶望あるのみかと云ふに、ソウでもない、社會が更に大に腐敗して、教育も政府も更に大に亂雜になつて來ると、ソコで青年アヽだコヽだと干渉を受けなくなり、自由に腕が振へる所から人物が出て來る」。

而して「亂雜不取締の福音は必ずしも一時の激語では無い」と結んで居る、社會の改革者の一方に世の暗黑面を深刻に穿撃すると同時に他方には悠々たる自然の光明を仰望して行かねばならぬといふ事を聞いて居りましたが、ホントにそう思ひます。

## 編輯局より

▲自然社會論に就て　前號の豫告にエドモンド・バーク氏の『自然社會論』を掲載する旨を申して置きました處、記事輻輳の爲に已を得ず延期しました、且つ六ヶ敷論文のみにては婦人の爲に興味を殺ぐの惧れありとの御注意が諸方より參りました故、他の記事との釣合を見計らつたのです、讀者諸君諒焉

△二葉亭四迷氏　が露國に渡航せられし結果、同氏の作物として本紙面を飾るべきものは一時絶ゆるでありませうか、併し同氏の筆に成れる日本婦人の記事と、露國に於ける察案にして特に本紙に適當せる問題とは時に從ひ本紙上に現はるゝでしやう。

## 讀者諸君へ謹告

前號（即ち廿五號）は無政府共產主義の大成者クロポトキン翁の畧傳と『パンの略取』の梗概とを掲載し、聊か斯主義の宣傳の便に供しました、然るに同號發行の豫告を公にするや、諸方より特別の御注文がありましたので、本社も其形勢を見計らひ、平生よりも印刷部數を増加致しました、其が爲め尚ほ二百部ほど殘本が保存してありますから、讀者にして斯主義の宣傳を希望せらるゝ方は左の割合にて御注文を願ひます

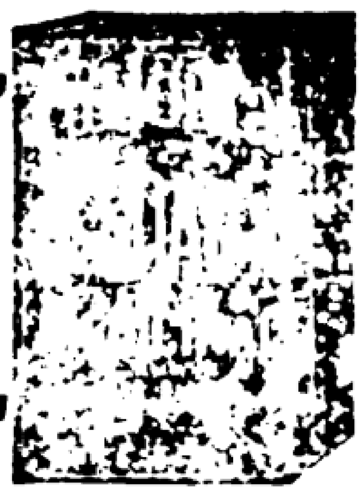
△十部　郵稅共　金五十錢

△廿部　郵稅共　金八十錢

御申込は郵便切手にても差支無し、御申込次第直ちに御送附致します。

△石川旭山氏　は出獄後身體の健康も回復せざるに本紙の爲には多大の助力を與へられて居ります、本號發行日の頃に至らば氏は旣に東都塵埃の街を去りて田園中に靜養の人となるゝでしやう、併し何れの處に行かるゝも本紙編輯に關する過半の勢力は依然氏の一身に懸り居るのです、氏に對しては眞に御氣の毒なれども本紙の苦境に在るを知れる氏は到底之を傍觀し給はざるべく吾等も之を拒むに由ないのであります。

キュチキュラ石鹸



夏はキュチキュラ石鹸を用ゆる婦人の天地也

キュチキュラ石鹸を使用せらるゝ婦人は夏は益々艶色を增して生れついたる美貌を輝かし給ふを得べし

之に反してキュチキュラ石鹸を使用せざる婦人は暑熱の爲に肌を犯され蚤や蚊に螫されたあとが較やもすれば腫物となり或は汗疹の爲に肌が汚なくなるべし

キュチキュラ石鹸を用ひ玉ふ婦人は暑くなれば暑くなるほど美人たるべし

キュチキュラ石鹸を用ひ玉はざる婦人は少し暑くなれば忽ち散三なり美色は瞬間に消ゆるべし

丸善洋物店

各唐物店小間物屋藥店等にあり　但し偽物御注意の事




Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

文學博士 法學博士 男爵 加藤弘之先生著

# 迷想的宇宙觀

昨年八月『吾國體と基督教』を刊行せし以來其批評紛々として既に數十種に上れり仍て今般その批評に對して更に批評を試み且つ簡短なる二大問題を舉げて讀者にその解答を乞へり基督教が迷信なりや否や又吾國體に有害なりや否やはその解答の如何によつて解決せらるゝを得べしと信ず大方の君子重ねて批評せらるゝことあらば幸甚

著者 加藤弘之敬白

定價金七十五錢　郵稅金八錢

ワーナー、ファイト氏原著
東洋大學講師 中島德藏先生述

# 解說批評 倫理學原論

（最良なる夏期講習會講本）

ワーナー、ファイト氏の『倫理學原論』は快樂論と觀念論との二大立脚地の調和を試みし者にして理論的に卓拔の見に富みしのみならず又當時社會の實際問題を捉へてこれに明快なる解答を與へし一新好著なりこれを以て吾國にても大島學士の飜譯によりて已に紹介せられつゝあり然るに譯文に慣れぬ讀者は往々その眞意を解する能はざるを遺憾としこれが解說を求むるもの少からず仍て一々質疑解答の勞を省かんため各篇各章の順を追て殆ど各節每に其の大意を取り最も簡易に明瞭に讀者をして原著者の意を曉はしめむと力め且つ讀過筆錄の際卑見を以てこれに批評を試みたるものは本書なり

述者 中島德藏敬白

定價金五十五錢　郵稅金八錢

文學博士 村上專精著

# 女性訓

定價四十錢　郵稅六錢

東京市小石川區原町六　丙午出版社　振替貯金口座一一五六八六番



# 熊本評論

月二回五日廿日發行　定價郵稅共四錢

第二十五號目次
▲過去の一年間▲將來の革命其の一（幸德秋水譯）▲敗北の一年（森近運平）▲社會主義の道德的根據其の一（大石祿亭譯）▲簡易社會主義（竹內善朔譯）▲議會に行くの必要ある乎其の一（[illegible]本克水）▲演說迫害記（森近運平）▲長太息其の一（宮崎民藏譯）▲米國同志の迫書（山川均）▲小說白頭の戀（堺利彥）▲海南評論（幸德秋水）▲國民とは何ぞや（革田命作）



# 趣味

第七號　定價廿錢　郵稅二錢　半年一册一圓二十錢　一年二册二圓五十錢

露國に赴ける 長谷川二葉亭氏
白鳥 泡鳴 龍峡 嵯峨家 風葉 秋聲 秋江 有明 曙夢 瀨石 星湖 蕪孤 島花袋 未明

故鄉の人（小說）秋田雨雀
解脫（小說）小栗風葉
寫生小話 高濱虛子

△文藝放談 坪內逍遙

西洋の風景 吉田博
散文詩 岩野泡鳴
二葉亭送別會 一記者

世間並（四十餘頁）……正宗白鳥

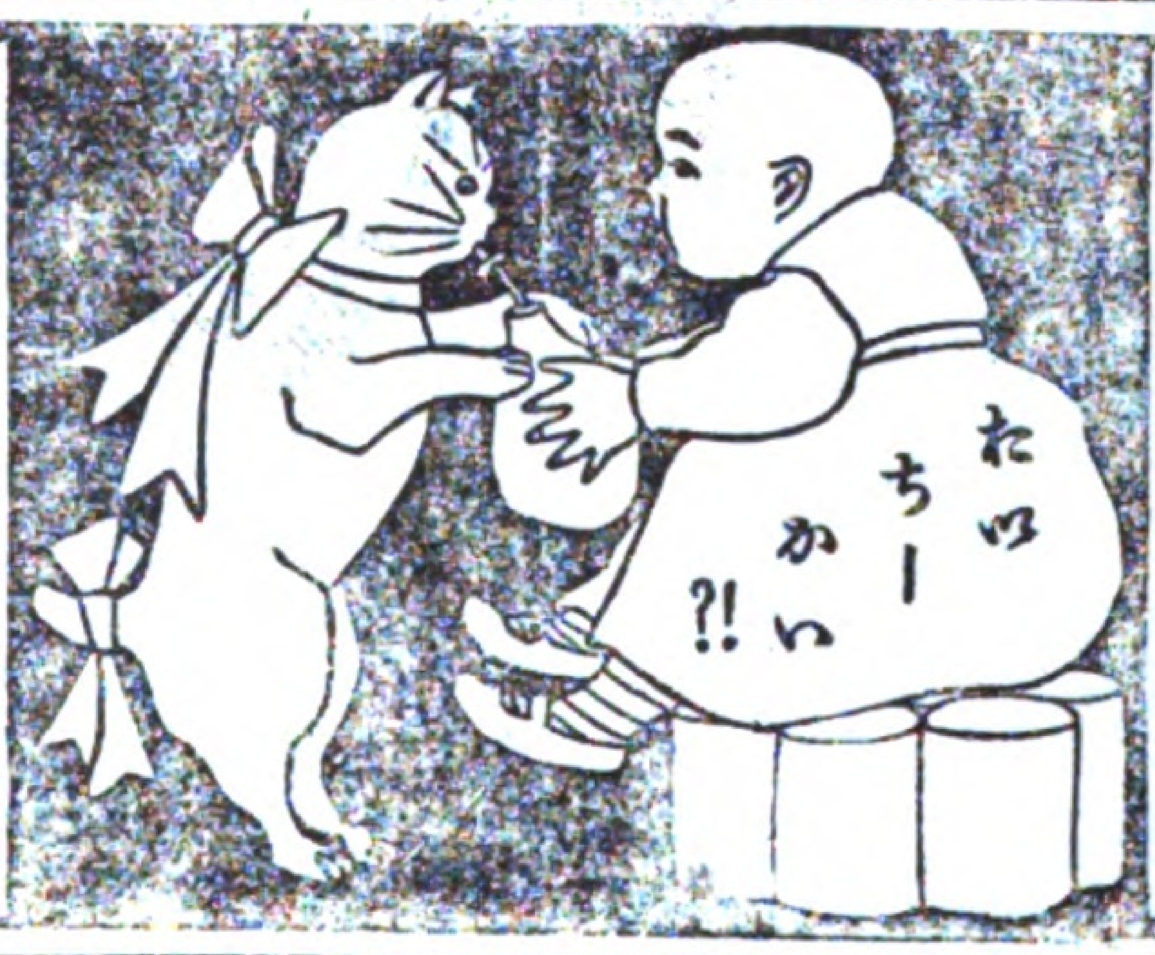
物の聲の最上 幸田露伴
趣味歌俳壇 空穗 松濱
椅の林 秋元蘆風

北海の漁夫 安部國松
文藝問語 旋風子
獨逸雜話 森安連吉

文壇諸大家の見たる 美人と美人系
風葉 秋聲 空穗 葉舟 水蔭 小や 花袋 孤雁 泡鳴

東京麴町區飯田町 易風社　振替一一〇二三四番






伊豆三島 花島煉乳場製 名譽ある 金鵄ミルク

發賣元 逸見山陽堂　東京市日本橋區大傳馬町（電話浪花二一五番　振替貯金口座三三九一六番）



例年の通り　本月二十日　廿一日　廿二日　廿三日　廿四日　廿五日　廿六日　廿七日　廿八日　廿九日　三十一日より七月二十日まで　例年の通り

# 天賞堂（神田本店・横濱）夏季大賣出し

◎福引景品 第一種一等 三越吳服切手五拾圓宛（一本もカラクなし景品制、合朋項の通り）
◎福引景品 第二種一等 天賞堂商品切手拾圓宛（一本もカラクなし景品制、合朋項の通り）

◎第一等三越吳服切手金五拾圓宛三十枚
◎第一等天賞堂商品切手金拾圓宛三十枚



# ●齒科治療●

自午前八時 至午後六時

齒科醫 吉瀨才市郎

東京神田須田町二十六番地

●學生勞働者諸君に限り藥價手術料共半額
●晝間執業者の便を計り夜間十時迄治療仕候



淚紅醫院長

醫士 一瀨鷹一

一院 日本橋區蠣殼町二丁目十四番地
二院 神田區連雀町十八番地

學生勞働者薄給者諸氏には藥價手術料共半減又へ無料



一度讀だら忘られぬ程面白ろい雜誌

# 少女の友

口繪
△東宮殿下御前揮毫者△白耳義公使秋月氏令孃△日本の花畧西洋の花畧△松方內藏大瀧氏令孃△れなばた（美麗彩色石版）△オツトセイ群居

▲どんな少女が感心な少女か……學院長
▲心得の奧様に……矢島女子

◎夏肩掛編方
◎家庭新遊戲
◎毒ある草花
◎姉の百物語

◎早口のお孃さん……與謝野晶子
◎吳服屋さん……星野水裏
◎光ちやんの魚釣……高信峽水
◎幸福の杖……須磨子
◎六才の女丈夫……中野初子

◎大洪水（長谷部雨湘）
◎歷史美談 侍女小萬
◎夏の水族館（涼しくて珍らしい）
◎蜘蛛の巢で魚を捕る
◎懸賞 繪さがし 歌つなぎ

◎七月一日發行 第六號
壹冊拾錢郵稅壹錢
六冊郵稅共六拾錢
十二冊壹圓十六錢

東京京橋南紺屋町 實業之日本社


◎定價
▲一部六錢●十部五十五錢●二十部壹圓
▲申込は總て前金の事

發行兼編輯人 神崎順一（東京府豊多摩郡淀橋町角筈七三八番）
印刷人 遠藤友四郎（東京府豊多摩郡淀橋町角筈七三八番地）
發行所 世界婦人社（東京府豊多摩郡淀橋町角筈七三八番地）
印刷所 博眞堂（東京市神田區雉子町廿四番地）



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY